

研究ノート

奈良時代初めの石城国の役割と建国の背景

— 東国における陸奥国支援体制の展開 —

荒木 隆*

1. はじめに

『続日本紀』養老二年(718)五月二日の記事には「陸奥国石城、標葉、行方、宇太、常陸国の菊多の6郡を割いて石城国を置く。白河、石背、会津、安積、信夫の5郡を割いて石背国を置く。常陸国多珂郡の郷210烟を割いて菊多郡と名付け、石城国の所屬とする」とあり、この時に石城・石背国が陸奥国から分離独立されたことがわかる。

石城国および石背国に属する郡の構成をみると、両国は現在の福島県域とほぼ重なる地域と考えられ、石城国は浜通り地方、石背国は中通り地方と会津地方に当たる領域である。

両国は陸奥国から分離独立され建国したが、その存続期間は非常に短かったと考えられている。『続日本紀』神亀五年(728)四月十一日の記事から陸奥国に白河団が設置されたことがわかる。白河郡は養老二年に石背国に編入された郡なので、白河郡が陸奥国の所屬として扱われていることから、神亀五年には既に石城・石背国は存在しておらず、陸奥国に再編入されていたことがわかる。

石城・石背国の陸奥国への再編入の時期は、養老五年(721)八月ごろと考える説が有力である。養老五年八月には陸奥国按察使が出羽国も管轄することになっている。おそらく養老四年(720)に起こった蝦夷の大反乱により陸奥按察使上毛野広人が殺害され、この事件を契機に蝦夷対策及び陸奥国支配体制再建のために各種政策が実施され、その中心施策として陸奥・出羽両国を管轄する按察使の任命が行われたと考えられる。これは、まさに東北日本の資源・人・行政の総力を結集させて東北日本における律令国家の威信を再建させるための動きであり、この前後で石城・石背国も陸奥国に再編入され、陸奥・出羽国の実質的統合政策が志向されたと考えられることができる。

養老二年から養老五年までの約3年間しか存在しなかった石城・石背国については、これまでさまざまな評価がなされている。「幻の」という修飾語を

付けて語られるように、両国は長期間存在しなかったゆえに、それほど重要性を帯びた国々ではなかったという評価を時々、目にすることがある。

果たして、そのように石城・石背国はあまり重要な地域ではなかったのであろうかという疑問が生じる。古墳時代の福島県域を見ると、坂東諸地域と同様に、ヤマト政権と深い結び付きがあった地域である。ヤマト政権とは一貫して安定的な関係を結んでいた地域であることから、東北日本の中でもヤマト政権にとって重要な地域であったと考えることができる。このように存続期間約3年の石城・石背国をどう評価するかは、福島県の古代史を考えるうえで非常に重要な問題である。

今回は、この石城・石背国の建国に関係する考古学的的事象をもとに、石城・石背国建国に込められた律令政府の意図及び考古資料から見えるその政策的成果について検討を加えていく。

2. 石城国建国までの地域状況

石城・石背国の役割を考える場合、その成立前夜の状況の中に、建国した地域の果たしていた役割、さらに期待された役割を推定できる材料が隠されていると考えられる。

そのため、それぞれの地域の主に古墳時代後期～飛鳥時代に関する特徴的な考古学的的事象を整理し、そこから見える地域の特性を明らかにしていく。

(1) 大化以前の石城と周辺地域との関係性

① 埴輪の類似性

ア) 古墳時代後期(6世紀初め)の須恵器系埴輪

浜通り地方の古墳時代後期の古墳群から出土する円筒埴輪の中で、特徴的な製作技法によって作られている円筒埴輪がある。円筒埴輪の外周調整の中で、ロクロの回転力を利用してハケメ調整を一気に全周させる技法(いわゆるC種横ハケ技法)を多用し、胴部最下段のタガ以下の部分(1段目)が他の段と比べて高さのあるものである。このような円筒埴輪は、須恵器工人が製作に関与した埴輪の系譜をひき、東海地方を中心に広がる須恵器系埴輪と呼ばれるも

*福島県立博物館



図1 神谷作106号墳出土円筒埴輪

のと考えられている(図1)。

このような須恵器系埴輪は、現在のところ県内では浜通り地方の神谷作106号墳(いわき市)、砂畑8号墳(いわき市)、丸塚古墳(相馬市)の3ヵ所



図2 須恵器系埴輪の分布

近にのみ分布する東海系の特殊な埴輪であり、いずれも海岸部に造られた古墳である(図2)。

このような分布から、東海地方といわき地方の交流、さらに被葬者と海の関係も匂わせるような立地となっている。

イ) 古墳時代後期(6世紀)の人物埴輪製作技術

古墳時代後期(6世紀中ごろ)のいわき地方を代表する神谷作古墳群(いわき市)の中の101号墳からは天冠埴輪と呼ばれる特徴的な人物埴輪が出土している(図3a)。赤色彩色した連続三角形文をモチーフとした装飾や、体のわりに短く造られた腕や指の表現方法など、他の古墳と比較して特徴的な造形



図3 いわきの人物埴輪(左a)と常陸の人物埴輪(右b)
a 神谷作101号墳出土人物埴輪(いわき市)
b 船塚1号墳出土人物埴輪(ひたちなか市)

を示している。この人物埴輪と同じようなモチーフで製作されているものが茨城県船塚1号墳(茨城県ひたちなか市)から出土している(図3b)。

このように、共通したモチーフの人物埴輪が面的な広がりを持たず、遠距離を点的に分布している。関東地方海岸部(常陸)といわき地方の交流、さらに沿岸部の古墳から出土することを考え合わせると、両者の交流が海と関連がある可能性が推定できる。

②横穴式石室の類似性

ア) 長大な横穴式石室の企画性

古墳時代後期(6世紀)になると、県内各地で古墳の埋葬施設として横穴式石室が採用され、終末期(7世紀)にかけて県内各地に広く分布するようになる。各地の横穴式石室の形態を見ると、さまざまな類型に分かれ、いくつかの系譜をたどり、複数地域からの影響を考察することができる。

赤浜4号墳(日立市)、勿来金冠塚古墳(いわき市)、法領塚古墳(仙台市)の3つの古墳の横穴式石室の形態を比較するとよく似ており、同じ技術系譜のもとに造られた石室であると考えられている(図4)。

さらに、赤浜2号墳(日立市)と蝦夷穴古墳(須賀川市)、甕ノ原2号墳(日立市)と前田川古墳(須賀川市)の石室もよく似た構造であり、これらの石室も同じ技術系譜の伝播による拡散と考えられている。

これらの石室の相似性は常陸地方といわき・須賀川地方、さらに北に位置する仙台地方との交流を跡付けるものである。後の常陸~石城~石背~陸奥(狭域)地域の間で、すでに古墳時代終末期には活発な地域間交流が展開していたことがわかる。

イ) 横穴式石室の拡散

横穴式石室は6世紀後半以降、常陸から北方に向

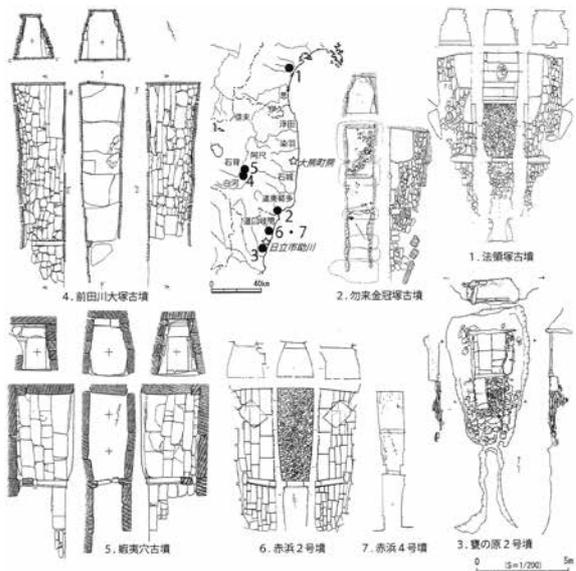


図4 陸奥と常陸の横穴式石室

けて展開しており、そのルートはまさに常陸地方～石城～陸奥（狭域）の範囲である。

このように太平洋岸に広がる地域間交流は、さらに時代が遡っても確認できる。5世紀末から6世紀前半にかけて常磐型刳抜式石棺が太平洋岸の陸奥（狭域）～石城～常陸の範囲に分布しているのもその一例である。

少なくとも古墳の石室形態の分布から、これらの太平洋岸地域の地域間交流が古墳時代後期まで遡ることがわかる。

③ 装飾古墳・横穴墓の分布

ア) 装飾古墳の広がり

横穴式石室の壁面に図像を描く装飾古墳は、虎塚1号墳（ひたちなか市）や十日塚古墳（霞ヶ浦町）などに代表されるように茨城県に集中して分布している。

これらの装飾古墳に採用されている横穴式石室はいずれも複室構造の石室を持つものであり、その壁面に武器・武具の図形（槍・盾など）に加え幾何学文（連続三角文など）を描いている。装飾古墳は常陸を中心に分布しており、主に常陸南部地域の独自性を示すものと考えられている。

イ) 装飾横穴墓の広がり

常陸南地域を中心に広がる装飾古墳に連動して横穴墓の玄室壁面に絵画が描かれる装飾横穴墓が茨城県から福島県、さらに北に位置する宮城県に分布する（図5）。十王前横穴（日立市）や中田横穴（いわき市）など著名な装飾横穴墓が、3県の太平洋岸地域周辺に展開する。

しかし、装飾横穴墓という共通した墓室形態をとる一方で、これらに描かれたモチーフを見ると、地域ごとに違いが見られる。常陸地域は槍や盾などの武器・武具の図形に連続三角文などの幾何学文を組み合わせたものが展開しており、同地域に分布している装飾古墳と類似したモチーフが描かれている（図6）。装飾古墳と装飾横穴墓で描かれるモチーフに差異は見られない。

プレ石城国地域（福島県浜通り地方）

図5 装飾古墳・横穴墓の分布



る一方で、これらに描かれたモチーフを見ると、地域ごとに違いが見られる。

常陸地域は槍や盾などの武器・武具の図形に連続三角文などの幾何学文を組み合わせたものが展開しており、同地域に分布している装飾古墳と類似したモチーフが描かれている（図6）。装飾古墳と装飾横穴墓で描かれるモチーフに差異は見られない。

プレ石城国地域

（福島県浜通り地方）

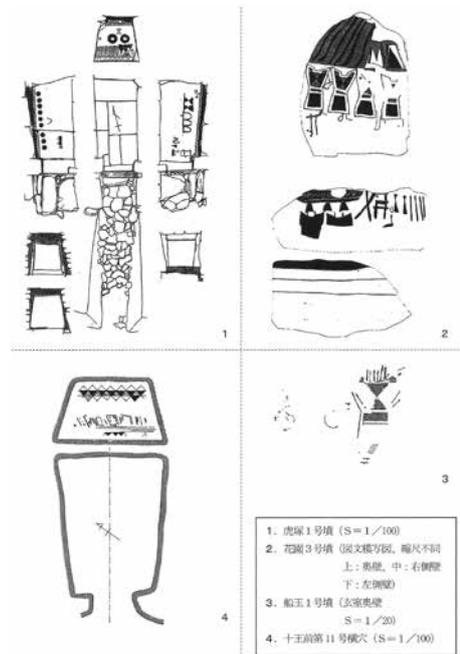


図6 茨城県の装飾横穴

では常陸地域で見られなかった狩猟文に幾何学文を組み合わせたモチーフが広がっている（図7）。プレ石城国地域に独自に展開する物語性・具体性に富む図案である狩猟文が採用された背景には、常陸地域とは違った文化背景が関与していると考えられる。

その一方で、常陸に一番近い位置にある中田横穴（いわき市）は、常陸地方に多く見られる複室構造の墓室に連続三角文などの幾何学文を描いており、常陸地方と強い共通性を持っている。プレ石城国地域の装飾横穴墓は、常陸地方からの影響を強く受けな

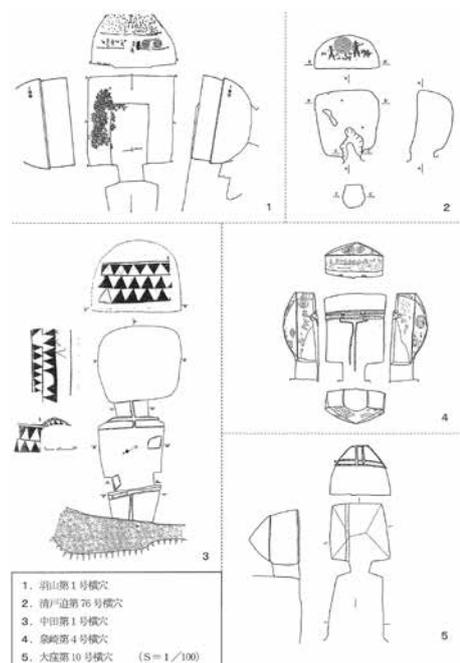


図7 福島県の装飾横穴

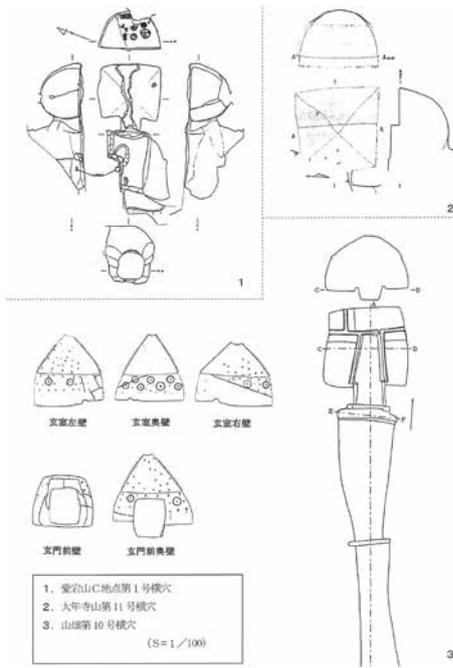


図8 宮城県装飾横穴

がらも、さらにそこから発展された地域独自のモチーフを展開させるなど、強い独自色も兼ね備えている。常陸地方との文化交流を基に一体的地域性が醸成される反面、地域の独自性・自主性も意識されている。

プレ石城国地域の北に位置する陸奥（狭域）地域になると、また採用される文様モチーフに変化が見られる。この地域は、常陸や石城で採用された武器などの器物文様や狩猟文などは採用されず、円文などの幾何学文が主流となって展開する（図8）。これは、常陸の文様モチーフの部分採用と考えられる。

以上のことから、常陸で流行する文様モチーフを受け入れて独自に発展させたプレ石城国地域と、部分的な文様要素を受け入れた陸奥（狭域）地域の違いは見られるが、両地域とも常陸との文化交流をもとに墳墓が造られていることがわかる。

ウ) コ字形造り出し屍床（肥後系横穴）の広がり

福島県内の横穴墓の玄室形態を見ると、いくつかの類型に分類することができる。その中には、棺を置く部分を意識的に区別する形態のものが見られる。玄室の奥壁側から両側辺にかけてコ字形に一段高くなる部分を造りだすもので、「コ字形造り出し屍床」と呼ばれている。これは、九州の熊本県地方を中心に分布しているもので、「肥後系横穴」とも呼ばれるものである。

このような形態の横穴墓は他の墓室形態と並存して分布しており、この墓室形態だけで構成される横穴墓群がないところから、この肥後系横穴に葬られた人物は、地元の間人と排他的な関係になかったこと

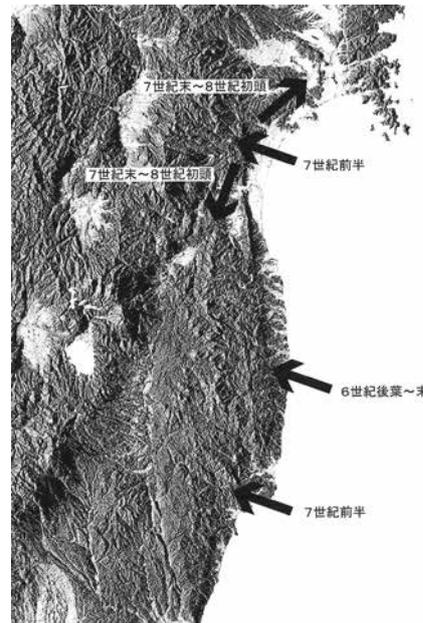


図9 肥後系横穴の広がり

域にある羽山横穴（南相馬市）に最初に採用され、そこから北の陸奥（狭域）地域へ、また南の常陸地域へ南北に拡大しながら広まっている（図9）。北へは桜小路横穴（亘理町）→山畑横穴群（三本木町）と広がり、南へは小申田横穴群（いわき市）→五郎穴横穴墓群（ひたちなか市）と広がっている。

7世紀末になると、仙台平野では豊富な副葬品を持たない横穴墓にも、この墓室形態が採用されることから、時間の経過とともに、この墓室形態を採用する階層が上位の人物から一般的な階層に拡大されていたことがわかる（岩橋2014）。

プレ石城国の行方郡周辺から南北に拡散展開する伝播経路は他の要素には見られない伝播形態であり、古墳時代の行方地域の特殊性を物語るものと考えられる。6世紀後半の行方地域は、金銅製双魚佩が出土した真野古墳群に代表されるように近畿地方、当時の中央政権との強い結びつきを示す在地勢力の存在を想定できる地域である。肥後系横穴の初期導入も行方地域の先進性を示すものと理解することができる。

④その他の希少遺物の分布

ア) 大型透孔付鉄鎌

大型透孔付鉄鎌は北部九州の古墳を中心に副葬される例が多く、北部九州以外の地域では遠隔地に孤立分布し、漸進的分布を示さない遺物といえる（図10）。福島県内では筑内古墳群（白河市）から出土しているが、周辺で最も近い出土例は静岡県宇藤A5号墳とかなり離れた分布となっている。筑内古墳は太平洋から常陸地域を北上する久慈川の上流部付近に当たり、北九州～東海～常陸～白河地域の交

が分かる。比較的豊富な副葬品を伴う例が多いことから、横穴墓群内に葬られた集団の中でも比較的上位の人物の墓に採用されたものであると考えられる。

この形態の横穴墓の分布域を見ると、現在のところ6世紀後半にプレ石城国地

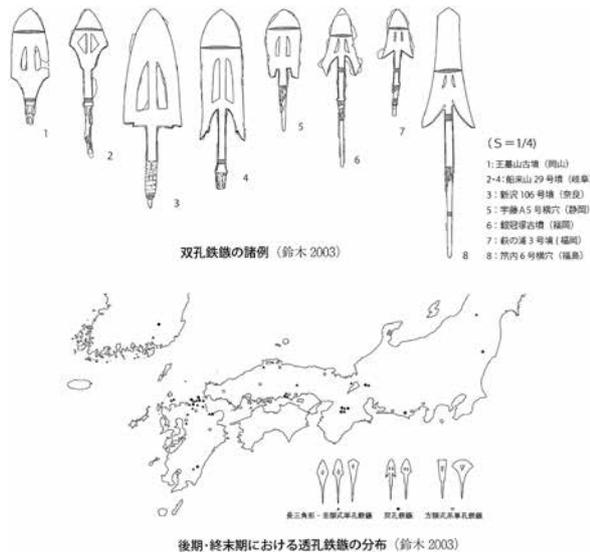


図10 大型透孔付鉄鏃の広がり

流を考えることができる。

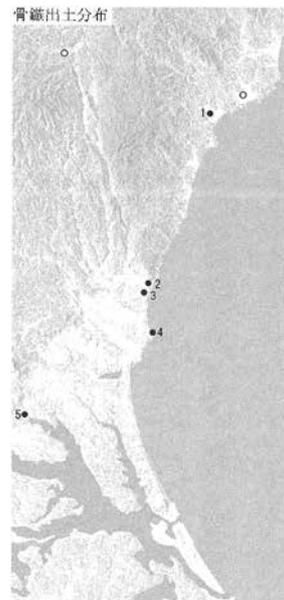
イ) 陶棺

後田古墳群 (いわき市) からは、現在のところ東北で唯一の陶棺が出土している。陶棺は古墳時代後期 (6世紀) の美作国 (岡山県東部) 地方に集中して分布しているが、その他の地域では分布は希薄である。いわき市以外の東日本での出土例も非常に少なく、群馬県太田市と茨城県茨城町で出土した記録があるだけである。

陶棺の集中分布域である美作国は和銅六年 (713)、備前守の百濟王南典と備前介の上毛野朝臣堅身の上申によって新設された国であり、初代国守には上毛野堅身が就任している。東国の上毛野 (群馬県) を出自とした上毛野氏出身の堅身が建国に関与しており、この美作地域と上野地域の関係は上野地域で陶棺が出土することから考えて、古墳時代まで遡る可能性も想定できる。上野とは別に常陸といわきについては、遠隔地の美作地域との何らかの直接交流を前提として考えることができそうである。常陸といわきを繋ぐ共通要素として海を介した交流が考えられる。

また、美作国は『日本書紀』欽明16年 (555) に置かれた白猪屯倉から発展して成立した国で、この屯倉は鉄生産に大きくかかわる特殊な屯倉であったと考えられている。備前北部から美作の周辺では鉄滓が採集できる遺跡がいくつもあり、おそらく5世紀後半～6世紀に、この地方で製鉄が行われたと考えられている。

美作国の建国に関与した百濟王一族は白村江の戦い以来の帰化氏族で、天平産金の際の陸奥守であった敬福をはじめとして鉱物資源開発と密接に関わる氏族である。



1: 勿来金冠塚古墳 2: 千福寺下 34・40号墓 3: 白方 7号墳 4: 磯崎東 24・34号墳付近 5: 大塚 5号墳

図11 骨鏃の広がり

このようなつながりの背景には、ヤマト政権の東日本支配の拠点であった上野地域と美作地域の氏族間ネットワークを基に海を介した美作 (瀬戸内地方) と常陸、さらには石城との交流があると考えることができる。

ウ) 骨鏃

6世紀から7世紀前半にかけて鏃身部の長い骨鏃が南九州に集中して分布している。

この骨鏃のもう一つの集中区が石城地域から常陸 (久慈川河口・霞ヶ浦・太平洋岸) にかけての地域であり、いずれも海上

交通の要衝と考えられる地域である (図11)。勿来金冠塚古墳 (いわき市)、千福寺下40号横穴 (茨城県日立市)、白方7号墳 (茨城県東海村) などの古墳で骨鏃が副葬品として確認されていることから南九州～常陸～石城の地域間交流が存在していたことがわかる。

同じ鹿角製の特殊遺物として鹿角製弭があげられるが、この地域では骨鏃と同じように勿来金冠塚古墳 (いわき市) や千福寺下40号横穴 (茨城県日立市) などで出土している。これらの遺物は漁労集団の出自を示す可能性が指摘されており、石城・常陸地方と遠隔地の海上交通による交流を示していると考えられる。

エ) イモ貝装馬具

イモ貝を使った馬具は北九州 (福岡県) 地方の古墳から集中して分布しており、その他の地域では瀬戸内海沿岸、さらに遠州灘沿岸から石城地方にかけて太平洋側に集中して分布している (図12)。



図12 イモ貝装馬具の広がり



図13 三角穂式鉄鉾の広がり

あるが、周囲の横穴墓と比較して大型の横穴構造であり、豪華な副葬品が伴う。

このことから、周囲の横穴墓の被葬者よりは上位の人物であることが予想され、両横穴墓も海辺に非常に近い場所に造営されていることから海上交通にかかわる人物像が想定できる。この遺物の分布からもやはり常陸～石城間の交流を考えることができる。

力) 鉄製馬具

県内出土馬具は6世紀前半の中通り・浜通り地方の限定された地域の古墳に副葬され始め、6世紀後半になると、県内各地の古墳に副葬されるようになる。7世紀前半になると馬具の副葬は激減し、限定された地域でのみ副葬されている。

この馬具の副葬された古墳の分布を見ると、6世紀前半では浜通り地方の行方郡と磐城郡、中通り地方の岩瀬郡で確認できる。この3地域は、奈良時代初めに建国される石城・石背国の主要地域である。

さらに、馬具が副葬される最終段階の古墳も、磐城郡と白河郡に限られ、両地域とも石城・石背国と坂東諸国の境界地域であり、後に国境となる重要な地域である。

以上のように、馬具が優先的に配布される地域は、陸奥南部地域の中でも中核を占める場所であり、常に磐城郡の地域は馬具が配布され続ける重要地域であることがわかる。

いわき市内では中田横穴、餓鬼堂23号横穴、八幡23号横穴、千代鶴11号横穴と海岸部に所在する横穴墓に副葬されている。これらの分布からも、北九州～常陸～石城との遠隔地交流が存在していたと考えられる。

オ) 三角穂式鉄鉾

三角穂式鉄鉾も珍しい遺物であるが、石城～常陸地方でも中田横穴(いわき市)と赤羽B支丘1号横穴(茨城県日立市)で出土している(図13)。両横穴墓は、いずれも6世紀後葉に造営されたものである

⑤国造の分布

陸奥南部地域は後の石城・石背国の領域である。ヤマト政権の国造設定地域の北端境界にあたり、この地域の北側は蝦夷世界が斑状に広がる不安定地域である。石城・石背国地域は古墳時代後期においても安定的にヤマト政権と密接な関係が結ばれている地域であり、いわばヤマト政権の東北地方への前線基地であると位置付けることができる。

この地域に任命された国造のうち、後に評が設置される行方と会津には国造の記載が無く、他の評の地域には国造が設置されている(図14)。その出自を『国造本紀』に基づいて分類すると、同族関係で3グループに分けることができる。

【第1グループ：天湯津彦命】

伊久(伊具)・亘(亘理)・阿尺(安積)・染羽(標葉)・信夫・白河

【第2グループ：建許呂命】

菊多・石背(磐瀬)・石城(磐城)

【第3グループ：豊城命】

浮田(宇多)

3つのグループの国造と同祖にあたる東国国造を見ると、第1グループに属する国造は東国にはいない。第2グループの国造には茨城(常陸国)・師長(相模国)・須恵(上総国)・馬米田(上総国)などが見られ、常陸から上総の海岸部を本拠地とした豪族たちであることがわかる。第3グループは陸奥南部では浮田国造だけであるが、東国には上毛野(上野国)・下毛野(下野国)が見られ、東国の中でも優勢な古墳文化が開いた上野・下野地域と強い関係性が見られる。



図14 東国における国造の系譜

第1グループは天神降臨神系の系譜を持つ国造で、東国には同祖の国造はいないが、他に佐渡(越後国)・阿岐(安芸国)・波久岐(周防国)・怒麻(伊予国)がおり、いずれも沿岸国の国造であるという共通性を持っている。このグループは阿武隈川流域と海洋沿岸部を支配する国造群といえる。

第2グループも天孫降臨神系の系譜を持つ国造であるが、

先に見た陸奥南部と東国に集中し、その他には周防国造(周防国)があり、これらの国造も石背国造以外は沿岸国の国造であるという共通性を持っている。石背国造も常陸から久慈川を遡った最上流部周辺であることから、太平洋と久慈川で繋がった地域の国造と評価することもできる。後の石城国・石背国・常陸国の中心地域が同族で治められており、石城・石背・常陸国の三角地帯が強い連携で結ばれていたことがよくわかる。

さらに、第3グループの浮田国造は陸奥南部では孤立的であるが、東国では上毛野(上野国)・下毛野(下野国)、畿内では針間鴨(播磨国)に同祖が分布している。これらの国造間の関係を見ると、東国の中でも優勢な古墳文化が開いた上野・下野地域と強い関係性があることを金銅製歩揺付き冠が出土した高松山古墳(相馬市)の存在が示している。

さらに、同族の国造が支配する播磨国についても、備前・美作・播磨に強い影響力のあった中央氏族化した上毛野氏と関係が強い地域であり、まさに上毛野氏が結びつけた地域であると考えられる。美作・播磨地域から遠い石城国内に陶棺が出土したことも、このような豪族間交流がもともとになっていたと考えられる。

⑥ 関東系土師器の分布

ア) 6世紀末～7世紀初頭の石城

いわき市内の古墳時代後期以降の遺跡から出土する土師器を見ると、泉町c遺跡46号住居跡出土資料のように関東系土師器と在来系土師器が共存する姿がしばしば見られる(図15)。出土比率を見ると、あくまでも在来系土師器が主体を示し、関東系土師器を出土する遺跡も多くはない。関東系土師器を使用する集団は多くなく、集団規模も小さいことから、関東地方から大規模な集団移住は無かったことがわかる。日常的な交流の中で関東地方から移住した家族や工人集団が定住するようなイメージの遺跡分布である。



図15 泉町C遺跡46号住居出土土師器

イ) 7世紀中葉の石城

古墳時代後期末の関東地方との関係が7世紀中葉

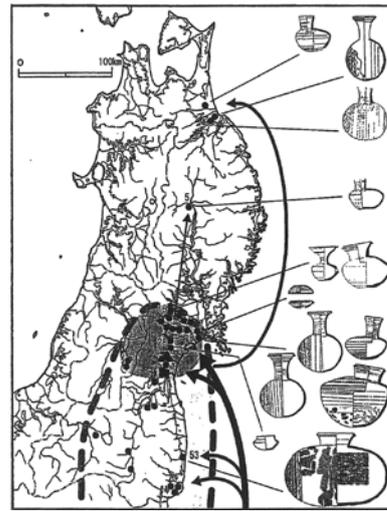


図16 東海系須恵器の広がり

に大きな変化が起こる。7世紀中葉段階の泉町c遺跡では在来系土師器と関東系土師器が共存する状況が続くが、関東系土師器の模倣品の出土割合が増す。さらに東海系須恵器(湖西産)や骨鏃などの遠隔地起源の遺物も伴うようになる。

7世紀中葉のいわき地方は関東的要素が増大するとともに遠隔地遺物も増加することから、地域間交流が急激に拡大することがわかる(図16)。関東以西の遠隔地要素が登場することから、この段階で地域間交流のあり方に大きな変化が発生したことがわかる。地域間交流の大きな画期の時期であり、東海～常陸～石城の間の交流が促進される。

ウ) 6世紀後半の仙台平野

古墳時代後期以来、石城地域と断続的に運動しながら地域間交流を続けている仙台平野も同じように、7世紀を境に地域間交流のあり方に大きな変化が生じる。後に初期陸奥国府となる郡山遺跡(宮城県仙台市)の西側には、材木塚などで周囲が囲われた囲郭集落である長町東遺跡(仙台市)が6世紀後半に登場する。この段階の囲郭集落は大規模なものではなく、関東系土師器の出土量も多くなく、関東地方からの本格的移住の準備段階として先行開発されたものであると評価できる。

エ) 6世紀末～7世紀前半の仙台平野

この段階で仙台平野と関東地方の交流のあり方が大きく拡大・発展する。前段階で登場した長町東遺跡などの囲郭集落が増大するとともに、関東系土師器が集中的に出土する集落も増加する。前段階で試行された関東系移民(柵戸)が増大した姿を表している。関東地方から石城地方、さらに北の陸奥(狭域)地方へと続く交流現象が6世紀後半段階に準備段階に入り、7世紀前半に本格化する(図17)。国造支配段階で関東地方から仙台方面に向かう移民政策が準備され、順調に進められたことを遺跡の分布状況が示している。

プレ石城国地域のように国造制施行範囲でも在来系社会再編に向けた動きが大化以前から開始されていることがわかる。この段階の国造制施行範囲は、古



図17 7世紀前半の関東系土師器の広がり

墳時代後期以来の在地社会が安定的に維持されている。そのため、関東地方からの移民導入による律令社会へ向けた安定化の必要がなく、仙台平野以北のように大量移民が実施されることはなかったと考えられ、必然的に集落構造・形態が一変するよ

うな劇的な変化も起こっていない。

この点が、後に同じ広域陸奥国の領域にはなるが、奈良時代前半に分離独立される石城国地域と狭域陸奥国地域の持つ地勢的違いであり、まさに国造支配地域であったかどうか、後の時代の地域の有り様までも規定しているといえる。

(2) 大化以前の遺物・遺構の地域分布が示す意味

①国内各地との交流の意味

これまでの希少遺物の分布や古墳時代後期のさまざまな社会現象を見ると、北九州～南九州～東海～関東～石城～仙台といった太平洋沿いに帯状に広がる文化交流が見える。この交流は、仙台～石城～常陸の間で見られるごく近い地域との濃密な類似性を示す要素と、遠隔地との孤立的類似性を示す要素に分けられる。このような2種類の類似性を同時に発生させる要因としては海を介した海上交通による交流の存在が考えられる。

②河口部周辺に展開する古墳群の意味

古墳時代後期のプレ石城国地域の古墳群分布を見ると、仙台～石城～常陸の区間の主要河川河口部沿いに展開している(図18)。各地の主要な古墳群は、南から那珂川、久慈川、鮫川、滑津川、夏井川、請戸川、新田川、真野川、宇多川、阿武隈川、名取川といった各地を流れる主要河川の河口部に位置している。

各地の主要河川河口部は、海上交通路における避難・補給場所等の役割を果たすとともに、主要河川を通して海と内陸をつなぐ水上交通路の要衝でもある。各地の主要古墳群は、河川及び海上交通の要衝を本拠地とした豪族の姿を示しており、古墳の被葬者が海上交通と深く関係していたことを示すものと考えられる。

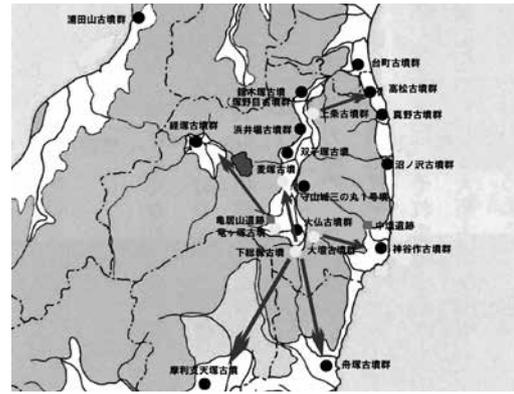


図18 福島県内の主な後期古墳

③海上交通を介した各地の交流の意味

ア) 海運を支える技術の訓練システム

古墳群の被葬者が海上交通と深い関係にあった可能性が考えられるが、当時の海上交通のあり方から豪族層の海上交通掌握のモデルを読み解くことができる。

古墳時代になると、船形埴輪が製作されたり、土器や古墳の壁画に船をモチーフにした絵画が描かれたりするなど、船を意識した造形が登場する。本県でも古墳時代初めの土器に準構造船の線刻画が描かれたものが八幡林遺跡(南相馬市)で発見されており、本県海域でも船を使った海上交通が行われていたことがわかる。つまり、弥生時代より更に進化した準構造船を積極的に活用した古墳時代の海上交通システムは、地域間の交流を飛躍的に進めたと考えられる。

一方、近隣地域だけでなく、遠距離地域へ航行するためには、船の運用に不可欠の要素である航海・漕艇・運輸・造船に関わる高度な専門知識と技能がそれまで以上に必要になる。これらの総合的航海技術体系の整備・発展が各豪族層の中では重要命題となり、海運技術を継承発展させていくための海洋技術者集団が古墳時代前期の鉄のように、各地の豪族からヤマト政権への要求リストに加わったと考えられる。

それぞれの沿岸地域には、それぞれの豪族が掌握する海洋民集団が存在していたことは、先の土器に描かれた船の存在からも容易に推測できる。さらに、それぞれの地域の海洋特性に応じて独特の航海技術が必要であることから、それぞれの海域に特化した海洋技術を持った集団が存在し、まさに海の専門技術集団として豪族に掌握されていたと考えられる。

各豪族が広域海上交通を志向した場合、違った海域での海洋条件にも対応できる航海技術の習得が必要不可欠である。新たな航海技術の習得には別の海域を航行する海上技術者との交流が前提条件となる。

このような豪族層の広域航行実施へ向けた技術導入は、おそらくヤマト政権側からの思惑も強かったと考えられる。5世紀以来、朝鮮半島に対する日本の軍事行動は高句麗好太王碑文や日本書記の記述などから明らかである。国内各地の国造軍が朝鮮半島に派遣されたことは容易に想像ができ、朝鮮半島に軍を派遣するために船は必要不可欠である。海外派兵のためには、日本海を縦断していくための操船技術が必要となり、しかも国内各地から徴発された兵士を乗せた船で船団を組んで渡航していくわけであるから、操船技術の標準化も必要となってくる。

どの地域の船や海洋技術者でも安定した渡航ができるような海洋技術の共有・平準化を進めようとするれば、平時において海洋技術者の交流を進め、全国的に海洋技術の標準化を進めておく意義は大きい。

豪族層にとっても、新たな海洋技術を導入することは大きなメリットがある。新技術の導入によって掌握している海洋民の錬度がさらに上がり、これまで以上に安定的に航海ができるようになるわけである。おそらくヤマト政権を通して各地の海洋民の一時派遣もしくは海洋民の交換などが積極的に行われたと考えられる。

このようなヤマト政権側の政策意図と豪族側の国内技術の発展に対する思惑が合致する形で海洋民の移動が行われた可能性は高いと考えられる。

イ) 石城国沖を流れる親潮の役割

プレ石城国地域を治めた豪族層も河口部に古墳群を展開させていることから、地域の海洋民を掌握し、沿岸部に沿う海上交通を管理していたと考えられる。

この地域の沖合には千島海流（親潮）が流れており、陸奥国から常陸国に向かって南下する安定した海流となっている（図19）。この千島海流も鹿島灘を越えると犬吠崎の沖合で日本海流と合流し、複雑な海流になるため、銚子沖周辺は現在でも船の難所として知られている。



図19 日本近海の海流

仙台～常陸間の海域は千島海流を利用した比較的安定した海上交通路として当時の重要な海上運輸ハイウェイであったと言える。仙台湾と鹿島灘手前の那賀川河口までの区間が安定した海上交通路と考えられ、主要古墳群もこの区間内に展開している。

太平洋沿岸の海上交通を掌握し、地域の物流拠点に君臨する豪族は、まさに地域の海運王と言える存在であったと考えられる。

ウ) 遠隔地往来と技術者派遣

イモ貝製飾り鋌や装飾横穴など、畿内では希薄な分布であるのに、遠く離れた九州と東日本に集中的に分布する遺物や遺構などが、古墳時代後期を中心に見られる。このような現象を説明するためのいくつかの仮説を提示しながら検討を加えていく。

a) 遠隔地交流で得るもの

遠隔地交流を示す遺物の故地を見ると、九州地方から関東地方までの幅広い地域に点在している。

これらの地域間を船で結ぶ往来の姿は比較的容易に想像がつくが、列島周辺の海域には、さまざまな海流のぶつかる海の難所がいくつも存在している。レーダーや自動制御装置が完備している現在でも海の難所として恐れられている海域は古代においても現代以上に恐怖の対象であったであろう。遠隔地との直接往来は非常に危険が伴う非効率的方法である。そのため、日常的に遠隔地と交流しているわけではなく、短期的に不定期に交流が行われたと考えるのが妥当であろう。このような契機として考えられるものとして、先に検討した海洋技術者の派遣もしくは貸与による技術交流があげられる。

このような交流であれば、小規模集団による一時的滞在や少人数の移住などであるため、地域の伝統的な土器要素を大きく変化させるなどの伝統的文化要素に対して大きな影響を与えることなく定着していくものと考えられる。

また、海洋技術者の派遣交流に伴う地域間連携の緊密さが国造の同祖意識に反映されていると考えられる。先に検討した千島海流沿岸に沿った東北海上交通の南端港は海流の関係で那珂川河口部と考えられ、河口部は那珂国造の本拠地である。常陸地域に配置された国造の中で那珂国造のみが神武天皇系の神八井耳命の系譜に属している。常陸国の国造が天孫降臨神の系譜を持つ者が多い中で異色の存在である。『国造本紀』とは別に『古事記』の記載によれば、那珂国造は伊予国造と道奥石城国造と同祖であり、伊予国～常陸国～石城国の間に何らかの関連があることがうかがえる。

海上交通路の要衝をおさえるこれらの地域の国造が同族意識を持つ背景には、海上交通技術者の他地

域からの導入が考えられる。他地域の海洋技術者を指導者として招聘し、地元海洋民の技術向上を図っていた状況が反映されていると考えられる。

b) 遠隔地交流の故地

これまで見てきた遠隔地交流の痕跡となる遺物の故地を見ると、いずれも高度な操船技術が要求される海の難所の周辺地域であることがわかる(図20)。

北九州地区には、玄界灘や関門海峡などの現在でも海の難所と呼ばれる場所がある。瀬戸内海及び北部九州周辺、さらに朝鮮半島に向かう航路上に位置する島々の周辺には複雑な潮流が発生し、高度な操船技術が要求される地域である。

美作・播磨地区が位置する瀬戸内海は比較的穏やかな海域というイメージがあるが、実際には西の関門海峡、中央部の来島海峡、東の鳴門海峡という海の三代難所を抱えた海で、瀬戸内海も海上に浮かぶ島々の影響で島間に複雑な潮流が発生し、高度な操船技術が求められる地域である。

熊本(肥後)地区が面している有明海も遠浅の海というイメージがあって比較的航行しやすい地域という印象があるが、有明海は干満差が最大4mになるような場所もある内海で、干・満潮時には強い潮流が発生する海域である。

南九州地域は日本海流(黒潮)が通る地域である。黒潮は最大4ノット(時速7.5km)の日本近海では最も流速が速い海流であり、しかも季節的大蛇行を繰り返すなど海流が不安定になる時期があるなど、高度な操船技術が求められる地域である。

東海地方も沖合いを流速が速い黒潮が流れ、冬の強い西風による高波、さらに避難港として利用できる河口の少ない海岸地形が続くため、遠州灘に代表されるように海の難所とされている地域である。

以上のように、遠隔地交流の痕跡となる遺物の故地は、いずれも高度な操船技術が要求される海の難所の周辺地域であることが確認できた。



図20 日本沿岸部における海の難所

これらの遺物の広がり背景には、考古学的には痕跡を確認しにくい、各地の海の難所を乗り切るために発達した高度な航海技術の伝播が隠されていると考えることができる。

c) 遠隔地交流の意味する関係

遠隔地との海上交通は沿岸航路を利用した直接往来ではなく、技術者もしくは他地域で育った2世技術者の招聘による技術交流を想定できるとしたが、技術者招聘を可能にしたものは、ヤマト政権内における豪族間の交流関係が基礎になっている。おそらくヤマト政権内の有力な中央豪族を仲介役として各地の豪族間で海洋技術者の派遣・貸与が進められ、海洋航海技術が広まっていったと考えられる。政権内有力豪族との親密な関係は海洋技術の技術移転だけでなく、先端技術や物資が中央豪族の仲介のもと、地方へ広がっていったと考えられる。

これらの関係から、伴造などの主従関係、または同祖国造系譜として近親性を表現する関係に発展していくと考えられる。

④小結

石城国から常陸国にかけては、古墳時代、特に6世紀頃から国内他地域の海洋技術者をヤマト政権の枠組みを使って積極的に招聘し、地域内の海洋従事者の育成に努めたと考えられる。

さらに、仙台湾～那珂川河口部の区間で主要河川の河口部周辺を拠点港として、千島海流(親潮)を利用した地域内海上交通ネットワークを発展させ、後に石城・常陸国となる海運行政圏の基盤形成を進めていたと考えることができる。

このような豪族間連携による海洋技術の共有化・標準化は、おそらく5世紀以降の主に朝鮮半島への出兵を機に進展してくると考えられる。遠隔地の特殊遺物を副葬した沿岸部の古墳や横穴墓が存在するという事は、おそらく海洋技術の指導者としてその地に亡くなるまで留まっていた他地域の人物がいたことを示していると考えられる。

通常の政権中枢部に対する朝見儀式などで形成される豪族間の絆より深い絆で結ばれた関係でなければ、技術者の永久派遣などは実現しないだろう。同じ時期に朝鮮半島派遣軍に編成された遠距離の豪族間の中で帰国後に技術者の交流が促進されたと考えたい。

この関係は、7世紀後半の天智朝における百濟救援軍派遣においても見られる。広島県寺町廃寺と本県腰浜廃寺(福島市)の瓦の類似性などは同様な意味を持つ現象と考えたい。

(3) 大化以後の周辺地域との関係性

①陸奥国版図の拡大

大化改新後、国造支配領域を基礎にその北側部分の不安定領域を加えた形で初期陸奥国（道奥国）が誕生する。この段階でプレ石城・石背国地域が、道奥国の中心部分として、律令政府の安定支配領域の北端の重要地域と認識されていたと考えられる。

ア) 仙台平野周辺の支配強化

安定支配が確立しているプレ石城・石背国地域に比べ、不安定要素の強い仙台平野周辺地域を安定的に支配できるようにすることが律令国家、さらに道奥国の最優先課題とされたと考えられる。

この政策遂行のために新たな城柵が設置され、郡山遺跡Ⅰ期官衙（仙台市）が造営される。郡山遺跡は7世紀後半段階で関東系土師器が急増し、この城柵に文献で知られているように関東地方からの移民、柵戸が導入された様子をうかがうことができる。

不安定要素が強い旧国造領域北側地域に関東地方の移民を大量に投入し、安定支配地に塗り替えていく政策が色濃く反映されており、この段階で坂東から陸奥（狭域）へ多くの住民が移動している。

イ) 大崎平野周辺の支配確立

仙台平野同様に、律令政府の支配拠点確立のために7世紀後半になると大崎平野においても囲郭集落が出現する。これらの囲郭集落は8世紀初めに集落の規模が拡大するとともに、集落数も爆発的に増加する傾向にある（図21）。

これらの囲郭集落では、関東地方からの移民流入を示す関東系土師器の割合が増加し、大規模な柵戸が導入されたことがわかる。

旧国造領域以外の道奥国では、安定支配に向けた城柵や囲郭集落など、防衛的機能を強化した施設を設置しながら大量の移民を強制的に配置することによって、律令国家の安定支配地の拡大を図ったこ

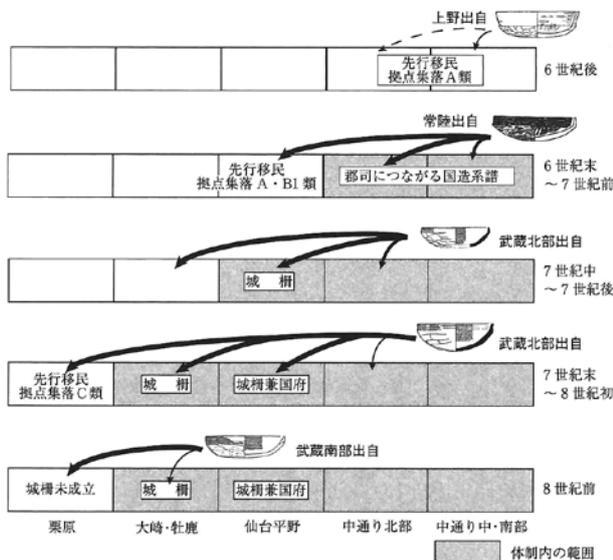


図21 関東系土師器の分布拡大

とが発掘調査の成果からよくわかる。

このような強圧的・威圧的政策展開が後に地元住民（蝦夷）との衝突の火種になっていくことになるわけである。

ウ) 陸奥国に広がる石城・石背国由来の郷名

仙台平野以北の地域に関東地方からの大量の移民が導入され、新たな郡が次々と建置された。この新設郡の建置に関しても、旧国造領域であるプレ石城・石背国地域が関与していたことが地名から推定できる。

移民の対象域		移民の出身地
浜・中通り	安積郡芳賀郷	下野国芳賀郡
	行方郡	常陸国行方郡
	行方郡多珂郷 日理郡望多郷	常陸国多珂郡 上総国望多郡
仙台平野	名取郡磐城郷	陸奥国磐城郡
	宮城郡磐城郷	陸奥国磐城郡
	宮城郡白川郷	陸奥国白河郡
	宮城郡多賀郷	常陸国多珂郡
大崎・牡鹿	黒川郡新田郷	上野国新田郡
	黒川郡白河郷	陸奥国白河郡
	賀美郡	武蔵国賀美郡
	賀美郡磐瀬郷	陸奥国磐瀬郡
	色麻郡相模郷	相模国
	色麻郡安蘇郷	下野国安蘇郡
	玉造郡信太郎郷	常陸国信太郎郡
	志太郡志太郎郷	駿河国志太郎郡
	新田郡	上野国新田郡
	小田郡賀美郷	武蔵国賀美郡
牡鹿郡賀美郷	武蔵国賀美郡	
栗原	栗原郡会津郷	陸奥国会津郡
	胆沢郡白河郷	陸奥国白河郡
	胆沢郡下野郷	下野国
北上	胆沢郡上総郷	上総国
	江刺郡信濃郷 江刺郡甲斐郷	信濃国 甲斐国

図22 陸奥国内の移民系地名の広がり

宮城郡（仙台平野）・黒川以北十郡（大崎平野）には、名取郡磐城郷・宮城郡磐城郷・宮城郡白川郷・黒川郡白川郷・賀美郡磐瀬郷など、石城・石背国の郡をもとに付けられた郷名（図22）があり、後の石城国や石背国の範囲からも移民が派遣されていたと考えられる。

道奥国の地域支配の進展のためには、坂東地域だけでなく、旧国造領域であるプレ石城・石背国地域からも

移民が投入され、プレ石城国地域から仙台平野へ、プレ石背国地域から大崎平野へというように陸奥（狭域）国地域へ坂東諸国と同じように住民の移動が実施されたことが推定できる。

②常陸国から見た石城国地域

ア) 石城評の設置

『常陸国風土記』多珂郡の記事を見ると、多珂国造が管轄する国（多珂国）の領域が広大であるため、多珂国造〔石城直美夜部〕と石城評造〔丈部許志赤〕らが申請して、旧多珂国を2分割して多珂・石城郡の2郡にしたことがわかる。

しかし、『常陸国風土記』に記載されている状況と他の文献に記載されている状況には違いがある。

『常陸国風土記』では石城地方を含めた常陸北部を多珂国造が単独で治めていることになっているが、『国造本紀』には石城国造・道奥菊多国造・道口岐閉国造・高国造・道奥岐閉国造の5名の国造が記載されており、『古事記』にも道奥石城国造・道尻岐閉国造が登場している。

いわき市周辺の後期古墳の分布を見ると、いわき市には塚前古墳（いわき市小名浜）のように東北最大の前方後円墳や、金冠塚古墳（いわき市勿来）のように大陸系金銅冠や鎧などが副葬される特異な古墳があるなど、いくつかの中心地域があったことがわかる（図23）。

このような考古学情報に基づいてこの地域の支配のあり方をみると、国造本紀に記載されているように、いくつかの豪族支配地が並存し、後の郡名を冠するような石城国造や菊多国造などの国造たちを束ねる代表的存在として多珂国造がいたと考えることができる。いわば常陸北部から陸奥南部の太平洋岸地域を総括的に管轄し、地域外に対する代表権者として「多珂国造」という名称が称号のように使われていたとも考えられる。東国における上毛野国造のような大国造とまではいかないまでも、複数国造域をまとめる代表国造としての「多珂国造」という名称と考えることができないだろうか。このような性格を持つ多珂国造の治める多珂国は現在の福島県大熊町から茨城県日立市までの範囲であることが『常陸国風土記』の記述からわかる。古代磐城郡の地域も多珂国に含まれ、その北半部を構成していることになる。

多珂国の領域のほぼ中央には小名浜湾が位置する。小名浜湾には中規模河川の藤原川が注ぎ、河口周辺には古墳時代前期の豪族居館が発見された菅俣・折返遺跡群（いわき市泉）が位置する。藤原川河口周辺に古墳時代前期の地域支配の拠点が配置されていることから、この河口部周辺が古墳時代前期から海

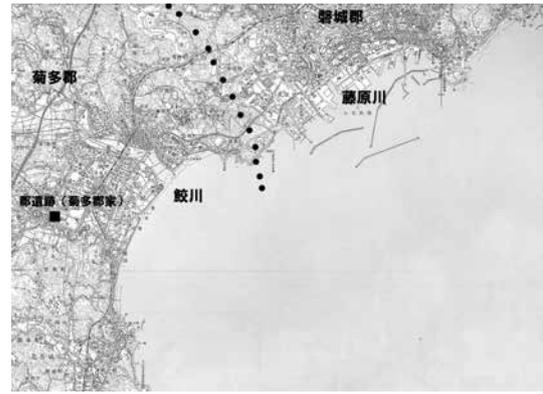


図24 石城湾と多珂国造国の推定分割線

運拠点として利用されていたと考えられる。

この小名浜湾に隣接する菊多浦も鮫川の河口部に面しており、後の菊多郡の主要港となる場所であり、藤原川河口部と同様に当時から港として利用されたものと考えられる。

この小名浜湾と菊多浦は巨視的にみれば、北の小名浜三崎岬と南の北茨城市五浦岬の間に広がる大きな湾（仮称「石城湾」）とみることもできる（図24）。この石城湾は、多珂国段階では多珂国中央部に位置する港として重要な役割を担っていたと考えられる。多珂国を分割する際に海運拠点「石城湾」の帰属が問題になったと考えられる。石城湾を2分割した石城・多珂の両評で利用できるようにするためには、湾内に両評の境界線を設定する必要がある。

石城評には藤原川河口部の津（港湾）が使用できる小名浜湾部分を帰属させ、多珂評には鮫川河口部の津が使用できる菊多浦部分を帰属させ、藤原川と鮫川の間地点に評境を設定したと考えられる。これは、石城湾の重要港湾としての利用価値を分割後の両評も活用できるようにするための施策と考えられる。

奈良時代初めの石城国建国により菊多郡が新設され、石城国に帰属させられるのも、多珂国段階に行っていた石城湾全体の一括支配体制を再開させるためと考えられる。荒田目条里遺跡出土木簡から郡家が津を管理していることがわかっており、藤原・鮫川河口部に位置する津の連携活用を進展させるために菊多浦を管轄する菊多郡を新設させ、石城国に帰属させたと考えられる。

イ) 石城で建造された大船

『常陸国風土記』香島郡の条には、以下のような内容の記事が載せられている。

香島郡軽野の浜に埋もれている難破船は天智天皇の時代（7世紀後半）に北方調査のために陸奥国石城の船造に造らせたもので、長さ約45m、幅3mの大型船である。



図23 律令制成立前夜の陸奥南部

この記事から7世紀半ばに石城に造船所や、大型船も建造可能な造船技術者が存在していたことがわかる。延喜式によれば、石城郡内に式内社「住吉神社」があり、しかも東日本では唯一の存在である。住吉神社は大阪の住吉大社の分社と考えられ、航海の神を祭る社であることから、中央政府により沿岸海上交通の安全を願って勧請されたと考えられる。

東日本の中で唯一、住吉神社が小名浜周辺に勧請されたということは、小名浜湾に東北海上交通路の拠点港が存在していたと考えられ、石城地域が東北海上交通を運営するうえで重要な地域であったことがわかる。

さらに、石城で建造した大型船が常陸沖で難破していることから、石城から常陸方面に延びる沿岸航路が存在していたこともわかる。

ウ) 道前里の海岸に刻まれた観音菩薩像の意味

『常陸国風土記』多珂郡の条には、国宰川原宿禰黒麻呂の時に、多珂郡道前里飽田村の海岸の石壁に観世音菩薩像が彫られたという記事が載せられている。道前里は多珂国造の領域の南端にあたる場所で、同書の記述では多珂国造の国の範囲は、久慈の境の助川を道前とし、陸奥国石城郡苦麻村をもって道後としたとされている。つまり、道前里は道奥（陸奥）へ向かう入口部分として意識された地域である。

『常陸国風土記』の他の地域の記述を見ても、仏像を設置した記事はなく、道奥への入口にあたる場所に観音菩薩像が彫られたことは、特別な意味を持った行為であったことがわかる。

『観音経』では、観音を念ずる事によって平時でも戦時下でも危害・災厄から逃れることができるとされており、観音菩薩像は当時の人々の道奥からの災厄防止の願いを象徴するものであると考えられる。

奈良時代から平安時代にかけての対蝦夷戦争は、記録に残されている大規模なものだけでも、和銅二年（709）を皮切りに、養老・神亀・宝亀・天応・延暦・弘仁年間の間に11回の大遠征が行われている。

この間は戦時体制として、兵士派遣、物資の調達・輸送、道路開発、城柵造営・修理、俘囚の内国移住が行われており、常陸国もこのような政策を遂行する上で大きな役割を果たしていたと考えられる。特に、宝亀から延暦年間にかけての大規模な遠征は坂東諸国からの物資と兵力に大きく依存しており、坂東諸国の支援なしには継続が困難であった。その中でも、常陸国は、陸奥国に一番近い補給基地として重要な役割を持った地域であるといえる。

しかも、観音菩薩像が海岸の岩壁に彫られたということは露天の磨崖仏であった可能性が高い。どこからでも見える場所に仏像を彫られたことから、こ

の仏像は多くの人々に見られることを意識して造られたことがわかる。この立地から考えれば、陸上交通路よりも海上の船から見えることを意識して彫られたと考えられ、常陸から陸奥へ向かって航行する船団を想定していると考えられる。『続日本紀』の記事から、対蝦夷戦争の激化に伴い、坂東諸国から多賀城に向かって物資が船によって運ばれたことがわかる。宝亀十一年（780）には下総国から糶6000斛、常陸国の糶1万斛を陸奥に運んでおり、天応元年（781）には穀10万斛を常陸・相模・武蔵・安房・上総・下総の坂東諸国に命じて船で運ばせている。

観音菩薩像の彫られた浜は、坂東諸国の船が陸奥国との間を往復する航路上にあり、まさに東北航路の陸奥への入口のランドマークといえるものであろう。

この他にも、養老七年（723）には常陸国那珂郡大領宇治直荒山が私穀3000斛を多賀城に輸送献上して外従五位下を授けられており、天応元年（781）には那珂郡大領宇治部全成と下総国印旛郡大領文部直牛養が、軍糧を輸送献上して外従五位下を授けられている。これらの大量の物資の供給先が那珂郡と印旛郡であるが、この両地域はともに当時の海上交通路の出発点や中継点となる津が想定できる場所で、大量の物資を運搬する際には海路が利用されていたと考えられる地域である。

これらのことから、当時、陸奥と常陸が海路を通じて密接な交流があったことがわかる。

エ) 常陸国守と陸奥

陸奥と常陸の密接な交流は、両国の国司の配属のされ方からも裏付けられる。

常陸国守を見ると、蝦夷征伐持節大將軍を任じられた藤原朝臣宇合、征夷副使として玉造柵を造営した坂本朝臣宇頭麻佐、陸奥守を2度も歴任した百済王敬福など、陸奥国守経験者が後に常陸守に就任している。さらに、藤原広嗣の乱の際に征討副將軍を任じられた紀朝臣飯麻呂など軍事に強い貴族も常陸国守として任命されている。

このような人事配置は、まさに陸奥国経営を支援する常陸国の責任者としての資質が求められた結果であると考えられ、陸奥国と常陸国の支配が東北支配政策の上で密接な関係があったことを示している。

オ) 式内社の配置からみえる常陸と石城

『三代実録』の貞観八年（866）条から、鹿島大神の苗裔神が陸奥国菊多、磐城、標葉、行方、宇多、伊具、亘理、宮城、黒河、色麻、志太、小田、牡鹿の13郡にわたって全部で38社あったことがわかる。この鹿島社の分布域はまさに太平洋岸を中心にした地域であり、海上輸送路の主要航路が通っていた石

城国と、対蝦夷戦争の前線基地である陸奥国（狭域）の地域にあたる。

このことから、鹿島神は対蝦夷戦争の守護神として前線地域で祀られていただけでなく、その補給路と考えられる主要交通路の拠点においても祀られていたことがわかる。石城国のすべての郡に鹿島大社の分社があることは、対蝦夷戦争の補給基地として石城国地域も重要な役割を果たしていたことがわかる。当時の人々の信仰の上でも、石城国と常陸国との密接な交流があったことを示している。

さらに、『延喜式』神名帳に記載された神社を見ると、常陸国の特殊性が一層よくわかる。坂東諸国の大社は、上総・下総・相模・下野国は各1座、武蔵・安房国に各2座、上野国に3座であるのに対して、常陸国には7座もあり、坂東諸国の中では大社が常陸国に特に集中していることがわかる。

さらに、常陸国の中でも、式内社の数は各郡1～3座程度であるが、那珂郡と久慈郡には各7座あり、他の郡と比べて集中していることがわかる。両郡とも那珂川と久慈川という内陸部から流れる大河の河口部に位置する郡であり、太平洋航路の良好な津、重要港湾が存在していたと想定できる郡である。

以上のことから、おそらく陸奥国と境を接し、対蝦夷戦争に関連する兵員や戦略軍事物資の供給先である常陸国、さらにその積出・中継港が所在する地域は辺境鎮護の重要拠点として認識されていたことを示している。

同様に陸奥南部における式内社の分布を見ると、行方郡8座、磐城郡7座、白河郡7座、信夫郡5座、その他の郡は1～3座となっており、浜通り地方・中通り地方それぞれの北と南に集中している。石城国地域でみれば行方郡と磐城郡であり、それぞれ製鉄コンビナート群が展開する先端工業地域、海運業拠点を抱える重要港湾の所在する郡であることから、両地域も対蝦夷戦争及び海上交通路の安定を祈る神社が集中的に配置されていたと考えられる。

このように、常陸国と石城国地域は密接な交流を基盤とした強い結び付きを持った連携国であったことがわかる。

このような両国の関係性は、当時最先端技術であり、民生用、さらに軍事用にも貴重であった鉄生産のあり方とも非常に関係してくる。

次に、製鉄遺跡群のあり方から石城国と常陸国の関係について検討を加えていく。

③製鉄遺跡群の展開

ア) 浮田国造地域（宇多郡・行方郡）の特殊性

石城国北端の宇多・行方評では、7世紀後半に東北で最初に製鉄技術が導入され、大規模製鉄遺跡群

が形成される。この石城国北端に展開する大規模製鉄コンビナートは、これ以降、平安時代まで継続して操業されている。

この製鉄事業の開始にあたっては、それ以前から操業している宇多評内の善光寺窯跡群で生産に従事している技術者を核に技術習得及び技術移転が行われたと考えることができる。善光寺窯跡群は大化改新以前から操業している東北で唯一の須恵器窯で、宇多評は周辺地域よりいち早く窯業技術が導入される特殊な地域である。このことはヤマト政権側からの技術導入により安定支配強化が図られた地域であることを示しており、宇多評地域は東北経営の重要拠点であったことがわかる。

古墳時代後期（6世紀前半）の浮田国造領域にある真野20号墳からは金銅製双魚佩が出土している（図25）。金銅製双魚佩は近江出自の継体王朝と関係の深い豪族の墓から出土する傾向にあり、行方評の「真野」郷という地名も近江国滋賀郡に同名の郷が存在する。このように、浮田国造の支配領域と考えられている宇多・行方評は近江国と地名や遺物など多くの共通性を持っていることが指摘されている（菅原2018b）。

浮田国造は、築造された古墳の規模や副葬品などから陸奥南部で有力首長があまり目立たない6世紀後半に近江と交流を持っている特異な豪族である。この特異性は先に見た国造系譜からも裏付けられる。浮田国造は、プレ石城・石背地域内で唯一、崇神天皇系の出自であり、他の評を治める豪族とは違った出自である。このことから、特別な役割を持っていたことがわかる。

浮田地方はヤマト政権側が東北支配を進めるうえで重要地域と認識されていたと考えられるが、その背景には松川浦の持つ港湾機能が大きく関わっていたと考えられる。東北海上交通路のルートを考えて場合、坂東沿岸国である常陸国から仙台湾のある狭域陸奥国に向けて、大きな港湾として利用できそうな河口部は、那珂川河口（那珂評）・石城湾（多珂

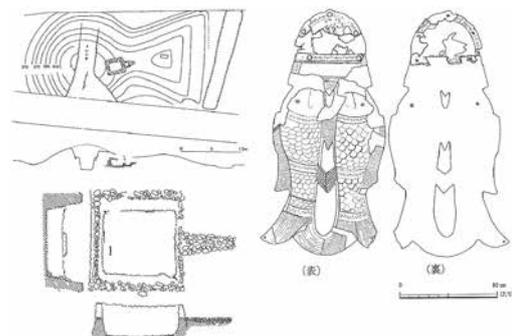


図25 真野20号墳と金銅製双魚佩

評・石城評)・松川浦(宇多評)・阿武隈川河口(巨理評)・名取川河口(名取評)である。石城国の重要港湾は北から阿武隈川河口、松川浦、石城湾の3カ所が考えられ、松川浦は石城国の東北海洋交通の中央に位置する扇の要となる港であり、その安定支配を目指すために早くから中央政権に注目された地域であったと考えられる。

イ) 技術導入を介した他地域との交流

石城国の北部の宇多・行方評と南部の石城評では、製鉄技術の導入を介して常陸国・近江国との交流の痕跡を見ることができる。

近江の瀬田丘陵生産遺跡群に見られる製鉄技術体系は、両側廃滓の長方形箱型炉と横口式木炭窯を組み合わせた生産ユニットを基本としており、7世紀後半にこの近江型生産ユニットが当地方に導入される(図26)。

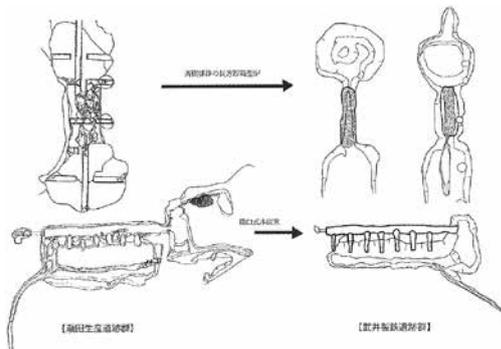


図26 近江から陸奥に伝わる製鉄技術

このような生産体制の確立のために、宇多評では武井製鉄遺跡群、行方評では金沢製鉄遺跡群が操業を開始する。

製鉄技術導入に関しては技術習得のための工人の交流が行われていた。製鉄遺跡群を含めた周辺遺跡からは上総や常陸国などの地域に由来した関東系土師器や、近江地方の火葬骨蔵器に由来した在地型火葬骨蔵器(図27)などが出土しており、近江国や坂東諸国から製鉄技術者が派遣されていたことがわか

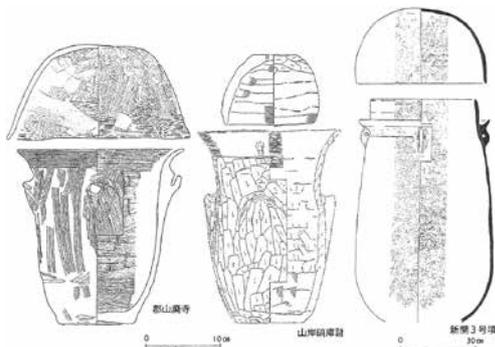


図27 陸奥で出土する近江系譜の火葬蔵骨器

る(菅原2018)。

さらに、近江国の瀬田丘陵周辺の遺跡で7世紀後半の東北系土師器が出土していることから、陸奥南部から近江に一時滞り技術習得していたことも指摘されている(菅原2018)。製鉄技術の導入に際して、双方向の人の交流があったことがわかる。

ウ) 製鉄遺跡から見る地域開発

製鉄遺跡群は、当時の評家から離れた地域に分布しており、当時の未開発地域を新たに開発する形で鉄生産が開始されている。

鉄生産の最初の段階では須恵器生産が伴うなど、鉄生産と須恵器生産はセットで生産活動が開始されている例が多く見られる。このようなセット関係は、当時の地域開発の中で意図的に仕込まれた生産活動であると考えられる。

発掘調査で確認されている生産遺跡群の消長をもとに地域開発のようすをモデル化すると、森林伐採→木炭焼成→須恵器焼成→製鉄→鍛冶と、高火度生産に適した地質・地形条件を持った地域の搜索と、より高度で付加価値の高い生産物を目指した開発地での生産展開が意図されていたと考えられる。現地での生産様態をみると、登り窯焼成技術(木炭・須恵器)→製鉄技術(鉄生産)→鍛冶技術(鉄加工)というように付加価値の高い生産技術を定着させるために生産活動が順次発展的に展開されていたことがわかる。

このような形で生産された鉄器は、陸奥国内へと配布され、開墾による地域の水田開発をはじめ各種作業の効率化・安定化に寄与したと考えられる。宇多・行方評は鉄器生産を通して陸奥・蝦夷世界の支配強化に寄与していたと考えられ、地域の生産力向上に向けた各種技術の在地への定着化がまさに律令国家による東北地方の安定支配の基盤を形成していったと考えられる。浮田国造の系譜が天孫降臨神といった抽象的な存在ではなく、現存する天皇系の系譜となっていることも中央政府と密接に関連した現地支配者としての浮田国造の性格をよく表しているといえる。

エ) 律令国家による製鉄技術導入の意図

浮田国造領域はヤマト政権の安定支配領域である国造域の北端から一領域分だけ内側の安定支配領域にあたり、国造制段階から優先的にヤマト政権から須恵器生産などの最新技術の移植が行われた地域である。この位置は、仙台平野以北の不安定支配が続く蝦夷領域に直接対峙するわけではないが、安定支配領域の北端近くに位置していることから、蝦夷領域支配に向けた政権側の北部拠点地域、いわば東北経営の重要拠点地域と認識されていたことを示して

いる。

浮田国造領域における大規模な製鉄コンビナート建設に伴う重点支配の強化策は、先に見た『常陸国風土記』における多珂国造領域の分割と同様に、浮田国造領域を宇多評と行方評に分割し、よりきめ細かい生産管理をする形として現わされており、そのことによって地域支配が強化されたと考えられる。

評設置段階で後の石城国領域の南北両端で広域国造国を分割して、きめ細かい支配の実施基盤となる評の設置が進められたことは、石城国地域の最重要拠点化を意図したものにとらえることができる。

このことは東北海上交通路のハブ港湾化と産業育成拠点整備を意味しており、近年、いわき市四倉岩出館跡でも横口式木炭窯が発見されるなど、石城国南端の石城郡地域も、宇多・行方評と同じような役割を早くから期待されていたことがわかる。

④寺院造営から見た石城国

ア) 東北最古の寺院建設の意味

7世紀第3四半期までに陸奥南部の旧国造領域の北端に2つの寺院が建立された。プレ石城国地域の宇多評には黒木田遺跡（中野廃寺跡）、プレ石背国地域の信夫評には腰浜廃寺跡が造営される（図28）。

浜通り地方の宇多評に所在する黒木田遺跡では素弁八葉蓮華文軒丸瓦が葺かれており、この瓦のデザインは近江国の前期穴太廃寺が祖型と考えられている（佐川2015）。中通り地方の信夫評に所在する腰浜廃寺も素弁八葉蓮華文軒丸瓦が葺かれ、こちらは近江国の衣川廃寺が祖型と考えられている（佐川2015）。

当時の律令国家の北端近くに建立された寺院の伽藍配置は発掘調査によって明らかにされていないため詳細は不明であるが、葺かれた瓦の祖型にあたる寺院はいずれも最古の川原寺式伽藍配置の寺院であり、この川原寺が大宰府観音寺式伽藍の原型となっている。

このことから、プレ石城・石背国地域に最初に建立された二つの寺院は、大宰府観音寺と同様に律令



図28 陸奥国で最初に建立される3寺院

国家の境界領域における鎮護国家思想が込められた寺院の可能性が考えられる（佐川2015）。

さらに、城柵機能の強い仙台郡山遺跡Ⅰ期官衙でも黒木田遺跡と同じ平瓦が出土していることから、城柵に付属した小規模な堂の存在が想定されている。城柵に付属する仏教施設も先の寺院と同様に鎮護国家思想を反映した宗教施設と考えることができる。

以上の点を踏まえると、大化直後に建立された3つの寺院は、まさに律令国家を鎮護する象徴的な寺院であり、いわば陸奥国3寺院体制が敷かれたことを意味している。これらの3寺院は、最北端城柵+阿武隈川最北端の水陸拠点+太平洋航路北端拠点港のランドマークとして、律令国家の重要地点における国家の威光を視覚的に表す記念物としての役割も果たしていたと考えられる。

イ) 評家・寺院造営に伴う軒瓦デザイン分布の意味

a) 評家・寺院に葺かれた軒瓦文様の故地

東北地方の評家や初期寺院の軒瓦には、関東地方からの影響が色濃く見え、両地方の交流が瓦にも反映されている。

郡山廃寺（仙台市）は郡山遺跡Ⅱ期官衙に伴う寺院である。郡山遺跡Ⅱ期官衙は最初の陸奥国府と考えられていることから、この寺院は最初の陸奥国府関連寺院と位置付けられる。この寺院に葺かれた単弁八葉蓮華文軒丸瓦は上野国上植木廃寺系瓦（東毛地区）で、同様の瓦は伏見廃寺・名生館官衙遺跡Ⅲ期政庁など陸奥（狭域）にのみ分布している（図29）。

黒木田遺跡（相馬市）は宇多評家関連寺院で、この寺院に葺かれた複弁八葉蓮華文軒丸瓦は上野国山王廃寺系瓦（西毛地区）で、同様の瓦が夏井廃寺（いわき市）の創建瓦の一つに採用されている。その他にも石城国領域を中心に広がっており、石城国+常

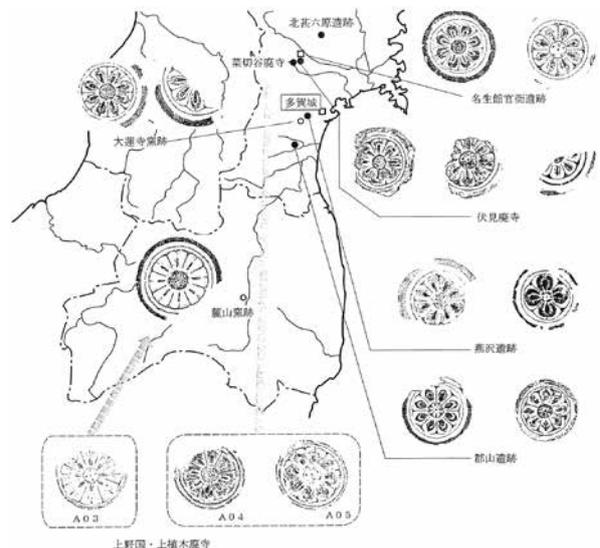


図29 陸奥北部に広がる上植木廃寺系瓦

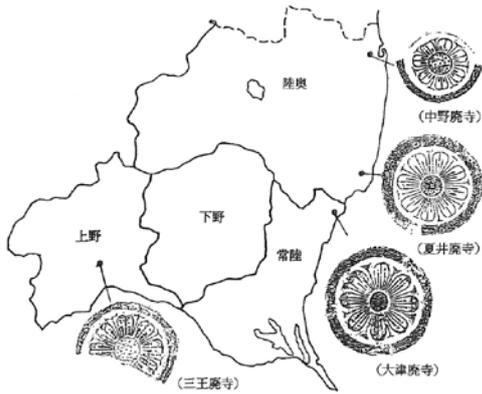


図30 福島県浜通り地方に広がる山王廃寺系瓦

陸国北部（大津廃寺のみ）+ 狭域陸奥国（柴田のみ）に分布している。この瓦は石城国地域を中心に分布している瓦といえる（図30）。

借宿廃寺（白河市）は白河評家関連寺院と考えられており、寺院に葺かれた交差鋸歯文複弁六葉蓮華文軒丸瓦は下野薬師寺系瓦と考えられ、石背国を中心に石城国の一部（夏井廃寺・大津廃寺のみ）に分布している。この瓦は石背国を中心に分布している瓦といえる（図31）。

b) 軒瓦文様デザインの意味

これらの初期寺院の瓦は、同系譜の瓦の分布範囲に地域的偏りが認められる。このような同系譜瓦の地域的偏りは祖形となる瓦が分布する地域との交流関係を表しており、瓦の祖形のある坂東諸国の関与を反映していると考えられる（佐川2015）。

つまり、坂東諸国が支援先を分担して東北の律令化を推進していた可能性が考えられる。上植木廃寺系瓦の祖形が広がる上野国東半部が狭域陸奥国地域、山王廃寺系瓦の祖形が広がる上野国西半部が石城国地域、下野薬師寺系瓦の祖形が広がる下野国が石背国地域を支援する姿をみることができる。

これらの支援元は上野国もしくは下野国であり、伝統的に東北支配に大きな影響を及ぼしていた上毛野氏の本拠地、広い意味での毛野国が道奥国を支援



図31 福島県中通り地方を中心に広がる下野薬師寺系瓦

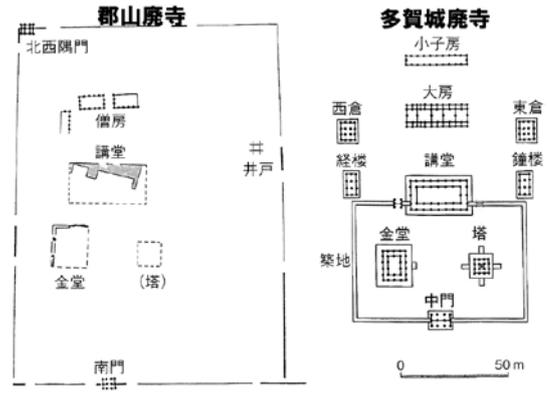


図32 陸奥国府関連寺院の郡山廃寺と多賀城廃寺

していたことがわかる。

ウ) 伽藍配置に見える領域支配思想

a) 各領域における伽藍配置

狭域陸奥国には初期陸奥国府関連寺院である郡山廃寺が建立され、この寺院は観世音寺式伽藍配置であることが分かっている（図32）。

石城国も、国域の南北に観世音寺式伽藍配置の寺院を配置している可能性が高いと考えられる。北部にある黒木田遺跡は宇多評家関連寺院と考えられ、伽藍配置は不明であるが、先に見たように創建軒瓦が前期穴太廃寺系であり、前期穴太廃寺が最古の川原寺式、大宰府観世音寺式伽藍の祖型であることから、大宰府観世音寺式の伽藍配置であった可能性が高いと考えられる。南部にある夏井廃寺も石城評家関連寺院と考えられており、観世音寺式伽藍配置であることが発掘調査で確認されている。

石背国では北に観世音寺式、南に法隆寺式伽藍配置の寺院を配置していた可能性が考えられる。北部の腰浜廃寺は信夫評家関連寺院と考えられている。発掘調査によって伽藍配置は確認されていないため、伽藍配置は不明であるが、創建期軒瓦が衣川廃寺を

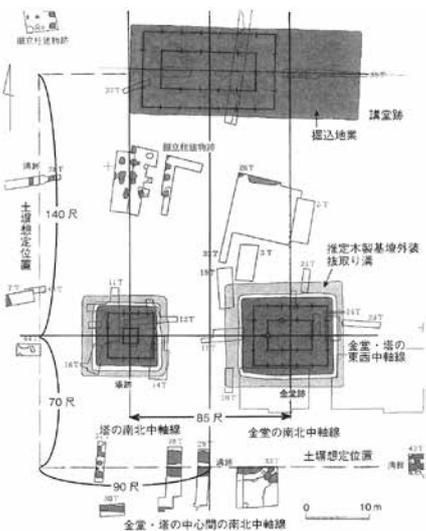


図33 借宿廃寺跡の伽藍配置

祖形にしているもので、この寺院が最古の川原寺式伽藍配置の寺であり、大宰府観世音寺式の祖型であることから、腰浜廃寺も黒木田遺跡同様に大宰府観世音寺式伽藍配置の寺院であった可能性が高いと

考えられる。南部の借宿廃寺は白河評家関連寺院と
考えられており、発掘調査によって法隆寺式伽藍配
置であることが確認されている（図33）。

以上のことから、陸奥国の初期三大寺院は大宰府
観音寺式伽藍配置、その後に建立される坂東諸国と
の境界地帯にあたる陸奥国南端の寺院は常陸国との
国境に大宰府観音寺式、下野国との境界に法隆寺式
が採用されていると考えられる。

b) 観世音寺式と法隆寺式伽藍配置の意味

夏井廃寺と借宿廃寺に採用された観世音寺式伽藍
配置と法隆寺式伽藍配置は共に東西に金堂と塔を並
立させる形式であるが、本尊の仏像が安置されてい
る金堂の位置の違いが形式差となっている（図34）。

観世音寺式は塔の西側に金堂を配置する西金堂タ
イプであり、寺のシンボルである塔の西側に広がる
西方浄土に例えられ、興福寺の例を見ると阿弥陀如
来が本尊として祀られていたと考えられる。法隆寺
式は塔の東側に金堂を配置する東金堂タイプであり、
こちらは東方瑠璃浄土に例えられ、薬師如来が本尊
として祀られていたと考えられる（菱田2005）。両形
式の本尊は薬師如来と阿弥陀如来であるが、両尊像
と関係深い儀式が毎年重要な儀式として行われてい
る。薬師悔過・阿弥陀悔過と呼ばれる災厄防除の儀
式であり、鎮護国家の仏教儀式の中で重要な儀式で
あったことが当時の記録からもわかる。

このような重要な仏教儀式の対象である薬師如来
と阿弥陀如来の二大鎮護仏が祀られた伽藍を国境近
くの場所に東西に対になるように建立するには特

別な意味があったと考えられる。両寺院は国境地帯
の守護そして陸奥国鎮護の靈的防波堤としての役割
を担っていたと考えられる。

**c) 狭域陸奥・石城・石背国に展開する寺院配置の
意味**

大化直後の7世紀第3四半期に道奥国府、プレ石
城国とプレ石背国の北端地域の3ヵ所に建立された
寺院は、いずれも観音寺式伽藍配置を持った寺院で
あった可能性が高く、道奥国3寺院が律令国家の象
徴として、また律令国家の国境防御の靈的防御線と
しての役割を担わされたと考えられる。

この後、7世紀第4四半期から8世紀初めにか
けて石城・石背国領域の南端地区に新設された夏井
廃寺・借宿廃寺の両寺院は、広域陸奥国への入口部
分にあたり、坂東諸国との国境地帯を抑える陸奥国
を象徴する寺院として設置されたと考えられる（図35）。
都から陸奥国へ向かう東山道・東海道の途上、両寺
院は陸奥国最初の寺院として、他の寺院と違った意
味を持たされたと考えられる。

プレ石城国の南端にある石城評の夏井廃寺には撞
竿支柱を伴う荘厳化装飾施設が確認されており、プ
レ石背国の南端にある白河評の借宿廃寺には現在の
ところ東北で唯一の埴仏が発見されており、都にあ
る寺院と同様に内部が金色に輝く仏堂が寺院の中に
建立されていた。

これらの寺院は観世音寺式伽藍配置と法隆寺式伽
藍配置が採用され、阿弥陀如来と薬師如来の2大尊
像が守護する陸奥エリアの玄関口を表徴していたと
考えられる。まさに東山道の白河関と東海道石城延
長路の勿来関に対応する形をとっており、交通施設
としての境界施設と並存する形で国境守護の宗教施
設も設置されていたことがわかる。

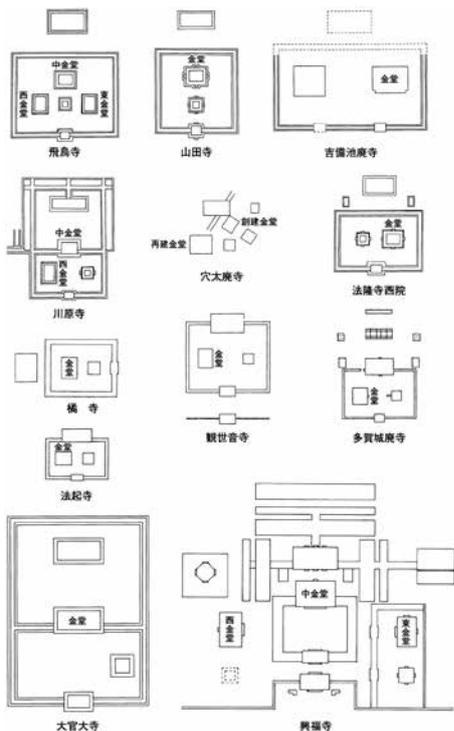


図34 主な寺院の伽藍配置



図35 7世紀末における寺院の広がり

律令国家の版図と国家の権威を示す視覚的記念物としての役割が壮麗な寺院建造物群に担わされており、先に見た道奥国初期三大寺院と組み合わせられることにより、広域陸奥国内の沿岸・内陸要衝に建立された鎮護国家のための寺院ネットワークの骨格が構築されたと考えられる。これらの陸奥国五大寺院は仏教の力で陸奥国支配を安定化させるための精神的支柱としての役割も持たされたと考えられる。

⑤小結

大化改新後、国造支配領域のうち後に石城・石背国になる地域は律令国家の北辺国である道奥国（初期陸奥国）の中心領域として、北に広がる蝦夷社会の直接支配を遂行していく拠点地域として、中央政府の支援を受けながら開発が進められた。

道奥国の開発は律令国家の東北統治政策を背景にして、関東地方および近江地方などからの技術導入により進められ、石城国は製鉄コンビナート群建設と海上交通路の拠点港整備を中心に地域開発が広い地域で進められた。このような中央政府による地域開発の積極政策は内陸部の石背国地域でも同様に進められたと考えられる。

さらに、地域開発を基盤とした道奥国支配と支配領域拡大の精神的支柱となる鎮護国家思想の具現化のために、上野国や下野国を始めとした坂東諸国の直接的支援のもと陸奥国五大寺（郡山廃寺・腰浜廃寺・黒木田遺跡・借宿廃寺・夏井廃寺）を中心とした寺院ネットワークが形成され、律令国家支配と鎮護国家のシンボルとして整備された。

このような坂東及び近江国との密接な関係が構築された背景には、当然のことながら律令国家がこの地域を重要視し、陸奥国内の地域開発を重要施策の一つとしていたことが関係している。

3. 石城国の役割

(1) 道奥国を3分割した国力・領域支配



図36 石城国・石背国・狭域陸奥国の範囲

奈良時代のはじめ、旧道奥国を3分割する形で石城・石背国が建国される(図36)。これにより、石城国、石背国、狭域陸奥国の3国体制による東北地方支配が始まる。それぞれの国力を考える指標となる郷数を延喜式記載の郷数と比較すると、石城国地域36郷、石背

国地域49郷、宮城郡以南の狭域陸奥国36郷となり、旧道奥国の範囲をほぼ同じ規模の国力になるように3分割されたことがわかる。

さらに奈良時代を通して比較的安定した支配領域となる黒川以北十郡の地域には28郷あり、奈良時代の北方開発により律令国家へ編入が果たされた地域が旧陸奥国（狭域）と同じ規模であることがわかる。奈良時代を通じて旧狭域陸奥国の国力は倍増されたといえる。

このように、石城国は当初の道奥国の1/3を占める国力を持った地域として理解でき、先進地の技術を導入しながら、陸奥国全体の地域開発を大きく支援する地域として坂東諸国と同様の働きをしていたと考えられる。

(2) 道奥国と坂東諸国の境界

道奥国南端の地である石城郡は常陸国との接点にあたり、陸奥と常陸の国境線は平安時代よりも北側に位置していた。石城国建国により菊多郡が設置され、常陸国領域は南に縮小され、国境線も南下する。この南下した常陸国との国境付近に菊多関が設置される。

石城国・石背国の建国により陸奥国の領域は北に縮小され、陸奥国（狭域）の南端国境は名取郡と亘理郡の間に設定されることになる。まさに、この段階に多賀城木簡で確認できる玉前関が設定されると考えられ、原遺跡（宮城県岩沼市）がその推定地と考えられている。この玉前関の立地は、まさに石城国を南北に走る東海道石城延長路と石背国を南北に走る東山道が合流する地点であり、坂東諸国と同じように狭域陸奥国を支援する諸国との国境地帯に設けられた施設と位置付けることができる。

その意味では、独立した石城・石背国は坂東諸国の一翼を担う国として位置付けられていたと評価することができる。

(3) 東北太平洋航路の重要拠点港ネットワーク

石城国の南端に位置する「石城湾」は、道奥国南端の拠点港であるとともに、独立した石城国においても同様に南端の拠点港であった。阿武隈川（亘理郡）～松川浦（宇多郡）～新田川（行方郡）～請戸川（標葉郡）～藤原川（磐城郡）～鮫川（菊多郡）という大河の河口に想定できる「津」は海上交通と河川交通を結合させる水上交通ネットワークの拠点である。このようなネットワークの中心となる石城郡の重要性を先に見た常陸国風土記の「大船建造」記事や延喜式内社「住吉神社」の存在が裏付けている。

(4) 太平洋沿岸陸上・海上交通路の重要ターミナル

石城国建国に伴う東海道石城延長路の整備により海道十駅が設置され、これらの駅家は太平洋沿岸陸

上交通路の重要なターミナルの役割を果たしていたと考えられる。駅家が津と密接な関係を持って設置されていることから、駅家は水陸交通路の結節点として、さらに地域交通の中核として重要な役割を果たしていたことがわかる。石城国に設置された駅家は、太平洋沿岸の水陸交通の重要拠点として地域支配の中核を担ったと考えられる。

(5) 太平洋－日本海連結陸上交通路の起点

本県中通り地方、さらに会津地方を經由して越後国への接続を意識した交通路は古墳時代前期以来ヤマト政権が東北支配を進めていく上で非常に重視した交通路であり、このルートは太平洋と日本海を結ぶ交通路でもある。

古墳時代以来の海上交通路の北への延伸と安定化は律令国家における東北支配の大動脈であり、この二つの海上交通ルートを連結させる東西陸上交通路は東北支配の生命線であったと考えられる。石城国から越後方面については大きく二つのルートが考えられ、南部の鮫川ルートは石城郡→白河郡→石背郡→会津郡→越後国、北部の夏井川ルートは石城郡→安積郡→会津郡→越後国となる。どちらのルートも東海道石城延長路を介して常陸国－陸奥国－越後国を連結する陸上交通ルートであり、石城・石背国の存在は日本海沿岸を走る北陸道と太平洋沿岸を走る東海道を連結させる陸上交通網の整備の点からも必要な存在であったと言える。

東北地方全体を支配していく上で、石城国は北部の狭域陸奥国地域を支援していく坂東と同様に重要支援国として貴重な存在であり、東北地方の安定的な交通体系を担う陸上交通路の要でもあったと評価できる。

4. おわりに

石城国の役割について、古墳時代後期の遺構・遺物を出発点にして検討してきたが、この地域の持つ地政学的重要性は少なくとも古墳時代前期から続くものである。この地方及び石背国を含めた現在の福島県域は東北経営の要として律令政府から重要視され、坂東諸国同様に陸奥国支援国として成長させるべく、先端技術を優先的に導入し、坂東諸国並みに経済・軍事的支援が行える陸奥支援国に向かって順調に成長を続ける予定であった。

しかし、養老4年(720)に発生した蝦夷大反乱は陸奥按察使を殺害するほどの大規模・計画的なものであり、この大反乱は律令政府に東北経営の難しさを思い知らせる大事件であった。律令政府にとっては蝦夷の大反乱の鎮圧と乱後の支配体制の再確立が重要案件であったことは想像に難くない。律令政

府の意地・面子を見せる必要がある重要な局面であった。

石城・石背国は陸奥国の重要な支援国としての役割を期待された地域であったが故に、蝦夷の大反乱後の陸奥国支配体制再構築には無くてはならない地域でもあった。陸奥国再建の要となる石城・石背両国の効率的運用を考えると、按察使による間接支配ではなく、陸奥国内への編入による直接管理の方法が選ばれたと考えられる。

このことにより石城・石城国内の物資・兵力、その他の社会的資源を陸奥国司が直に移動・使用できる形になり、対蝦夷政策を即応性を持って円滑に進めることができるようになる。陸奥国の支配体制再構築のためには石城・石背国地域を併合した一体的運用が必要であり、石城国・石背国は東北経営の最重要地域ゆえに独立が維持できなかつたといえる。

養老4年の蝦夷の大反乱が発生していなければ、石城・石背両国は陸奥国の支援国として現在とは違った歴史を歩んだことであろう。

陸奥国支配体制の再構築という大義のために身を賭した石城・石背国の姿は、幕末の戊辰戦争の会津藩に重なるものがある。この他にも、福島県の歴史を紐解けば明治・大正の帝都の発展を支えた会津の水力発電、戦後復興を支えた常磐炭鉱、高度経済成長以後の関東地方を支えた浜通り地方の原子力発電所群と、まさに東日本の発展を支えた福島県の姿を見ることができる。東北、さらに東日本を支えたふくしまのDNAをここに見ることができる。

石城・石背国は東日本の発展を支えた福島県の重要性を歴史に刻む重要な証言者であるといえる。

「このような郷土の歴史から私たちは何を学び、これからどのように行動していったらよいのであろうか。」

福島県に住む一人一人の人たちがこの点を考える際に、私たち博物館人は、何を、どのような形で提供できるのか、常に考えて行かなければならない。

石城・石背国の存在意義に関する分析を通して歴史事象が私たちに伝えていることを読み解く重要性を改めて学ばされた。今後、さらに研鑽を深めていきたい。

今回の論考を作成するにあたって、さまざまな方々からのご指導・助言をいただいた。常に示唆的なヒントを与えていただいている宮城県多賀城研究所の村田晃一氏ならびに福島県文化振興財団遺跡調査部の菅原祥夫氏をはじめ、今年度、石城・石背建国1300年記念事業においてお世話になった毛野考古学研究所の早川麗司氏、いわき市教育文化事業団の猪狩みち子氏、須賀川市教育委員会の菅野和弘氏、

南相馬市教育委員会の藤木海氏の各氏には講演資料作成および本論執筆に際していろいろとお世話になった。記して感謝の意を表したい。

参考文献

〈発掘調査報告書等〉

いわき市教育委員会1989『番匠地遺跡・久世原館跡－古代鋳造遺跡・中世城館跡の調査』いわき市埋蔵文化財調査報告第24冊
 いわき市教育委員会1993『久世原館・番匠地遺跡－弥生水田と古代集落の調査』いわき市埋蔵文化財調査報告第33冊
 いわき市教育委員会1999a『常磐自動車道遺跡調査報告13 五反田A遺跡－古代陶工集落・近世屋敷跡の調査』いわき市埋蔵文化財調査報告第57冊
 いわき市教育委員会1999b『滝ノ作遺跡－古代集落跡の調査』いわき市埋蔵文化財調査報告第62冊
 いわき市教育委員会1999c『清水遺跡－古代集落跡の調査』いわき市埋蔵文化財調査報告第63冊
 いわき市教育委員会2000a『根岸遺跡－磐城郡衙跡の調査』いわき市埋蔵文化財調査報告第72冊
 いわき市教育委員会2000b『常磐自動車道遺跡調査報告16 大谷遺跡－古代集落跡の調査』いわき市埋蔵文化財調査報告第68冊
 いわき市教育委員会2001a『荒田目条里遺跡－古代河川跡の調査』いわき市埋蔵文化財調査報告第75冊
 いわき市教育委員会2001b『一般国道6号常磐バイパス遺跡発掘調査報告Ⅸ 小茶円遺跡－古代集落跡の調査』いわき市埋蔵文化財調査報告第76冊
 いわき市教育委員会2002a『小茶円遺跡－市道馬場1号線改良工事に伴う調査』いわき市埋蔵文化財調査報告第81冊
 いわき市教育委員会2002b『一般国道6号常磐バイパス遺跡発掘調査報告Ⅹ 荒田目条里制遺構・砂畑遺跡－古代陸奥国磐城郡官衙関連遺跡の調査』いわき市埋蔵文化財調査報告第84冊
 いわき市教育委員会2003『市道下小川梅ノ作線内埋蔵文化財発掘調査報告 梅ノ作瓦窯跡群－陸奥国磐城郡古代窯跡の調査』いわき市埋蔵文化財調査報告第98冊
 いわき市教育委員会2004『夏井廃寺跡－陸奥国磐城郡古代寺院の調査』いわき市埋蔵文化財調査報告第107冊
 いわき市教育委員会2010『神谷作106号墳・白穴横穴群－滑津川下流域南岸における古代墓跡の調査－』いわき市埋蔵文化財調査報告第141冊
 いわき市教育委員会2014a『震災復興土地地区画整理事業地内試掘調査報告2（薄磯地区）－薄磯貝塚周辺部の調査－』いわき市埋蔵文化財調査報告第160冊
 いわき市教育委員会2014b『磐出館跡－横口付木炭窯跡の調査概報－』
 いわき市教育委員会2017『泉第三土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告Ⅸ 泉町C遺跡2－古代集落跡の調査－』いわき市埋蔵文化財調査報告第179冊
 白河市教育委員会2010『借宿廃寺跡』白河市埋蔵文化財調査報告書第55集
 須賀川市教育委員会2018『石背国建国1300年 上人壇廃寺国史跡指定50周年記念事業「まぼろしの国 石背」』
 富岡町1987『富岡町史』第3巻考古・民俗編
 榎葉町教育委員会1997『赤粉遺跡－平安時代前期集落跡の発掘調査報告－』榎葉町文化財調査報告書11集
 広野町教育委員会2017『災害公営住宅内遺跡調査報告2 桜田Ⅳ遺跡－奈良・平安時代の集落跡の調査－』広野町文化財調査報告第6冊
 福島県教育委員会1996a『常磐自動車道遺跡調査報告6 大猿田遺跡（1次調査）』福島県文化財調査報告書第329集

福島県教育委員会1996b『常磐自動車道遺跡調査報告8 馬場B遺跡・大久保A遺跡・大久保F遺跡』福島県文化財調査報告書第330集
 福島県教育委員会1996c『常磐自動車道遺跡調査報告9 タタラ山遺跡（1次調査）』福島県文化財調査報告書第331集
 福島県教育委員会1998『常磐自動車道遺跡調査報告11 大猿田遺跡（2次調査）』福島県文化財調査報告書第341集
 南相馬市教育委員会2007『泉廃寺跡－陸奥国行方郡家の調査報告－』南相馬市埋蔵文化財調査報告書第6集
 南相馬市教育委員会2008『泉廃寺跡－陸奥国行方郡家出土瓦の報告－』南相馬市埋蔵文化財調査報告書第12集
 南相馬市教育委員会2012『泉官衙遺跡－陸奥国行方郡家出土土器・木簡の報告－』南相馬市埋蔵文化財調査報告書第20集
 南相馬市教育委員会2015『南相馬市内遺跡発掘調査報告所8－平成23・25年度試掘調査報告－』南相馬市埋蔵文化財調査報告書第22集
 宮城県教育委員会2016『熊の作遺跡ほか－常磐線復旧関連遺跡調査報告書』宮城県文化財調査報告書第243集
 〈論文〉
 荒木隆2000『陸奥南部の郡衙立地条件と水運』『福島県立博物館紀要』第15号 福島県立博物館
 荒木隆2011『陸奥南部の『海の道』』『福島考古』第52号 福島県考古学会
 荒木隆2013『陸奥南部における古代の国境祭祀と交通路』『福島考古』第55号 福島県考古学会
 荒木隆2014『陸奥南部における古代交通路－郡家と官道・川・海の利用』『福島県立博物館紀要』第28号 福島県立博物館
 荒木隆2016『交通路から見た陸奥南部におけるヤマト政権の地域支配』『福島県立博物館紀要』第30号 福島県立博物館
 猪狩みち子2007『集落・土器から見た陸奥南部と常陸国北部の境界様相』『第44回 古代城柵官衙遺跡検討会』
 猪狩みち子2018『古代磐城郡家の成立と変遷における諸問題』『列島の考古学－渡辺誠先生古稀記念論集』古稀記念論集刊行会 纂修堂
 稲田健一2014『イワキとヒタチ』『海の古墳を考えるⅣ－列島東北部太平洋沿岸の横穴と遠隔地交流』海の古墳を考える会
 岩橋由季2014『横穴墓からみた東北地方における他地域との交流－コの字形造出屍床を有する横穴墓を中心に－』『海の古墳を考えるⅣ－列島東北部太平洋沿岸の横穴と遠隔地交流』海の古墳を考える会
 垣内和孝2008『石城・石背両国の成立と廃止』『郡と集落の古代地域史』岩田書院
 柏木善治2014『関東地方沿岸部の横穴墓について－関東地方南部の神奈川県を中心として』『海の古墳を考えるⅣ－列島東北部太平洋沿岸の横穴と遠隔地交流』海の古墳を考える会
 川口武彦2012『常陸国の多賀城様式瓦からみた陸奥国との交流－那賀郡衙正倉院・正倉別院出土瓦を中心として－』『古代社会と地域間交流Ⅱ－寺院・官衙・瓦からみた関東と東北－』国士舘大学考古学会
 菊地芳朗2015『前方後円墳の終焉と終末期古墳』『東北の古代史2 倭国の形成と東北』吉川弘文館
 木本元治1996『東北地方の複弁六葉蓮華文軒丸瓦』『論集しのお考古－日黒吉明先生頌寿記念』論集しのお考古刊行会
 工藤雅樹2001『律令国家とふくしま』歴史春秋社
 熊谷公男2015『蝦夷支配体制の強化と戦乱の時代への序曲』『東北の古代史3 蝦夷と城柵の時代』吉川弘文館
 草野潤平2018『東北南部の国造存否問題と古墳動向』『第44回 古代城柵官衙遺跡検討会』
 佐川正敏2012『寺院と瓦生産からみた律令国家形成期の陸奥国』『古代社会の地域間交流－寺院・官衙・瓦からみた関東と東北－』国士舘大学考古学会編 六一書房
 佐川正敏2015『東北への仏教の伝来と寺院造営・瓦生産』『東北の

古代史3 蝦夷と城柵の時代』吉川弘文館
 佐藤敏幸2014「東北地方における7～8世紀の東海産須恵器の流通」『海の古墳を考えるⅣ－列島東北部太平洋沿岸の横穴と遠隔地交流』海の古墳を考える会
 眞保昌弘2012「陸奥国南部を中心とした川原寺系鏡瓦の展開とその意義」『古代社会と地域間交流Ⅱ－寺院・官衙・瓦からみた関東と東北－』国士舘大学考古学会
 眞保昌弘2014「出土瓦にみる中央集権国家形成期陸奥国支配体制の画期とその側面」『日本考古学』第37号 日本考古学協会
 菅原祥夫2004「東北古墳時代終末期の在地社会再編」『原始・古代日本の集落』同成社
 菅原祥夫2010「居宅と火葬墓」『研究紀要2009』福島県文化財センター白河館
 菅原祥夫2011「宇多・行方郡の鉄生産と近江」『研究紀要2010』福島県文化財センター白河館
 菅原祥夫2013「陸奥南部の国造域における大化前後の在地社会変化と歴史的意義」『日本考古学』第35号 日本考古学協会
 菅原祥夫2014「陸奥と近江の交流」『海の古墳を考えるⅣ－列島東北部太平洋沿岸の横穴と遠隔地交流』海の古墳を考える会
 菅原祥夫2015a「製鉄導入の背景と城柵・国府、近江」『月刊考古学ジャーナル 特集東北古代史の再検討』No.669 ニューサイエンス社
 菅原祥夫2015b「律令国家形成期の移民と集落」『東北の古代史3 蝦夷と城柵の時代』吉川弘文館
 菅原祥夫2017a「もう1つの製鉄工人系譜－陸奥国信夫郡安岐郷と安芸国」『福島考古』第58号 福島県考古学会
 菅原祥夫2017b「蝦夷の移配開始とその周辺－天智朝期を中心として－」『平成29年度科学研究費補助金基盤研究C研究成果報告書 俘囚・夷囚と呼ばれたエミシの移配と東国社会』帝京大学文化財研究所
 菅原祥夫2018a「北限の旧国造と近江・安芸国で交錯する人・モノ・情報」『第44回 古代城柵官衙遺跡検討会』
 菅原祥夫2018b「郡山Ⅰ期官衙と製鉄－陸奥国行方郡真野郷の畿内系土師器をめぐって－」『福島考古』第60号記念号 福島県考古学会
 鈴木啓1996『南奥の古代通史』歴史春秋社
 鈴木敏則2014「湖西窯における須恵器生産－湖西産須恵器－」『海の古墳を考えるⅣ－列島東北部太平洋沿岸の横穴と遠隔地交流』海の古墳を考える会
 千田一志2014「装飾古墳と装飾横穴」『海の古墳を考えるⅣ－列島東北部太平洋沿岸の横穴と遠隔地交流』海の古墳を考える会
 竹田裕子・高島好一2014「いわき市出土東海系須恵器」『海の古墳を考えるⅣ－列島東北部太平洋沿岸の横穴と遠隔地交流』海の古墳を考える会
 田中裕2014「古墳時代の陸路と海路－とくに『海の古墳』との関係に関する今日的視覚－」『海の古墳を考えるⅣ－列島東北部太平洋沿岸の横穴と遠隔地交流』海の古墳を考える会
 鶴見諒平2012「横穴式石室について」『海の古墳を考えるⅣ－列島東北部太平洋沿岸の横穴と遠隔地交流』海の古墳を考える会
 出浦崇2012「上野国からみた陸奥国－上植木廃寺出土軒先瓦との対比から」『古代社会と地域間交流Ⅱ－寺院・官衙・瓦からみた関東と東北－』国士舘大学考古学会
 永田英明2015a「古代東北の内陸水運」『日本古代の運河と水上交通』八木書店
 永田英明2015b「城柵の設置と新たな蝦夷支配」『東北の古代史3 蝦夷と城柵の時代』吉川弘文館
 西川修一2014「『海洋民』について－漂泊・零細・停滞・後進性…その呪縛を解く」『海の古墳を考えるⅣ－列島東北部太平洋沿岸の横穴と遠隔地交流』海の古墳を考える会

東影悠2009「陸奥国南部を中心とした川原寺系鏡瓦の展開とその意義」『古代社会と地域間交流Ⅱ－寺院・官衙・瓦からみた関東と東北－』国士舘大学考古学会
 菱田哲郎2005「古代日本における仏教の普及－仏法僧の交易をめぐって－」『考古学研究』第52巻3号 考古学研究会
 平川南2012『東北「海道」の古代史』岩波書店
 昼間孝志2012「鋸齒紋縁複弁軒丸瓦の伝播－北関東と南東北にみる類似した動態」『古代社会と地域間交流Ⅱ－寺院・官衙・瓦からみた関東と東北－』国士舘大学考古学会
 廣谷和也2014「列島東北部における大型透孔付鉄鎌－筑内6号横穴出土資料の位置づけ－」『海の古墳を考えるⅣ－列島東北部太平洋沿岸の横穴と遠隔地交流』海の古墳を考える会
 福島県立博物館1988『企画展 東国のはにわ 展示図録』
 藤木海2012「瓦からみた陸奥南部の寺院造営と坂東－山王廃寺系軒先瓦の文様と技術系譜」『古代社会と地域間交流Ⅱ－寺院・官衙・瓦からみた関東と東北－』国士舘大学考古学会
 藤木海2018「南奥地域の官衙・寺院からみた律令支配の成立とその推移」『第44回 古代城柵官衙遺跡検討会』
 三舟隆之2008「多珂評の成立と大津廃寺」『地域と文化の考古学Ⅱ』明治大学文学部考古学研究室
 村田晃一2015「版図の拡大と城柵」『東北の古代史3 蝦夷と城柵の時代』吉川弘文館
 吉田敏2018「古代南奥地域の歴史的な性格－石城・石背国を中心に－」『第44回 古代城柵官衙遺跡検討会』
 吉野武2015「出土文字資料と多賀城碑」『東北の古代史3 蝦夷と城柵の時代』吉川弘文館

挿図目録

- 図1 いわき市教育委員会2010より転載
- 図2 東影悠2009より転載
- 図3a 当館所蔵画像
- 図3b 福島県立博物館1988より転載
- 図4 草野潤平2018より転載
- 図5 稲田健一2014より転載
- 図6・7・8 千田一志2014より転載
- 図9 岩橋由季2014より転載
- 図10 廣谷和也2014より転載
- 図11・12・13 稲田健一2014より転載
- 図14 須賀川市教育委員会2018より転載
- 図15 いわき市教育委員会2017より転載
- 図16 佐藤敏幸2014より転載
- 図17 菅原祥夫2004より転載
- 図18・20・24・36 自作
- 図19 西川修一2014より転載
- 図21・22 菅原祥夫2015bより転載
- 図23 藤木海2018より転載
- 図25 菅原祥夫2014より転載
- 図26・27 菅原祥夫2018aより転載
- 図28・31・32・33 佐川正敏2015より転載
- 図29 出浦崇2012より転載
- 図30・35 福島県教育委員会1996cより転載
- 図32 菅原祥夫2018bより転載
- 図33 宮城県教育委員会2016より転載
- 図34 菱田哲郎2005より転載